

『シンベリーン』：美德の鑑は翳りなき美の鑑か

三 戸 祥 子

Cymbeline: Are the Virtues Unstained?

Sachiko Mito

序

シェクスピア晩年の作と言われるロマンス劇四作品のうち、第二作目の劇『シンベリーン』に対する評価は1940年代以降、それが作品の構成であれ、主題であれ、表現手法であれ、それ以前の傾向とは異なって、批評家達の間には統一した見解というものはないと考えてよい様相を帯びている。

それ以前は、たとえば、18世紀における『シンベリーン』批評は、おおむね、取るに足りぬ作品という見方で占められている。その批評内容は、劇構成に一貫性をかいているとか、物語の展開の内容そのものも馬鹿げていると、なかなか手厳しいものである。そして、この時代の作品観を最も象徴的に代弁しているのは、Samuel Jhonsonの言葉、“unresisting imbecility”であろう。¹ 又、やはり18世紀の詩人Alexander Popeなどは、第五幕四場、ポスチュマスの夢の場面（the vision scene）は劇展開の流れを阻むものとして、削除し改作を試みてさえいる。²

ところが、19世紀になると、『シンベリーン』に対する評価は一転して肯定的なものに変わる。いやもっと大胆に、作品は賞賛の対象へと大きく変わっていくと言わなければならない。劇構成に対する厳しい批判も影を潜め、劇の伝えようとする意図に関しても、より深い、宗教的あるいは、道徳的意味を見ようとする傾向が強まっていく。そして、この時代にあって既に、現代では何の疑問の余地のないこととして受け入れられているが、ロマンス劇特有の主題に言及しているDenson J. Sniderのような存在のあったことも見逃すことのできない事実であろう。³

しかし、19世紀を代表する『シンベリーン』批評と言え、何といっても、女性主人公イモージェンの賛美であろう。それは、女神崇拝に近い評価であつたらしい。William Schlegel, William Hazlitt, Algenon Charles Swinburn等、彼等は一様にイモージェンを女性の美德の鑑として賞賛した。⁴ イモージェンは、シェイクスピア作品中の全女性人物の備える、ありとあらゆる美德を与えられた最高の女性として讃られている。Swinburnは、「永遠の命」として人の記憶に留められる女性人物としては、イモージェンとクレオパトラとが並び称されるものとしながらも、女性の美德の理想像としては、女神の如き不滅性を備える人として、イモージェンに並ぶものはないと考えたのである。Swinburnにとってはそれこそが、イモージェンをイモージェンたらしめる所以であつた。⁵ そして、我々が忘れてならないのは、こうした賛美の言葉をイモージェンに掲げる人々の中に、女性批評家Anna Brownell Jamesonが含まれていることである。⁶

こうして、多くの批評家から『シンベリーン』に対して高い評価が与えられることになった19世紀であつたが、20世紀を迎えるとその評価は急降下し、18世紀にSamuel Johnsonの示し

た辛辣な批評を再び支持する傾向が批評家の間で強まってくる。⁷ そしてその酷評を生む最大の根拠となったのは、いわゆる authenticity の問題——作品の執筆はシェイクスピア独りの筆になるものではなく、他作家の助力を仰いでいるのではないかという疑い——が浮上してきたことである。あるいはまた、Ashley H. Thorndike のように、同時代作家の作風を真似て、自己の創作力の衰えを糊塗しようとしたのではないかという厳しい見方をする批評家も登場してきたことである。⁸ 他作家の助力を仰いだとする Horace Howard Furness などは、シェイクスピアが直接筆を取ったのは、僅かにイモーゼンの登場する場面に過ぎぬとさえ考えた。⁹ そして、同時代作家の模倣であると主張する Thorndike は、エリザベス朝演劇を支え、そしてジャコビアン朝演劇にも貢献したシェイクスピア達の次代を担う、若い二人の作家、Beaumont と Fletcher の作品に注目した。そして、彼らの作品 *Philaster* と *Cymbeline* とが多くの点で似通っていることを根拠に、シェイクスピアがこの二人の作風を真似たのではないかと考えたのである。¹⁰ だが、両者に共通する点があることは否定できないとしても、現在では、この考え方はかつてほど支持されてはならず、『シンベリーン』はシェイクスピアの単独作品と考えられている。それだけではなく、J. M. Nosworthy のように、むしろ、Beaumont と Fletcher の方がシェイクスピアを模倣して *Philaster* を書いた可能性が高いとする批評家もあるのである。¹¹

さて、以上見てきたように、作品『シンベリーン』に対する評価は、酷評から賞賛、賞賛から酷評へと、世紀の変化（移行）と共に二転三転してきた経緯を持つことが分かる。そして、この議論に一応の終止符を打ったのが、20 世紀半ばに現われた G. Wilson Knight の歴史的観点から試みた作品解説である。¹² 彼は、『シンベリーン』に描き込めた歴史的要素に重要な意味を見出し、更に、劇は全体として見たとき、英国の国家的重大事を描いていると考えた。登場人物に関しては、それぞれ古代ローマとブリテンの価値を体現する存在として対峙させて捉えようとしている。何より注目すべきは、Alexander Pope によって、劇の自然な展開を図る上で無用であるばかりか、劇的效果を阻害するものとして削除される運命となった、第五幕四場のポスチュマスの夢の場面（の存在の意味）を甦らせたことであろう。Wilson Knight は、この夢の場面こそ、劇の主題を集約させて描いた場であると説いたのである。そして、この見解はまた、『シンベリーン』がシェイクスピア独りの手による単独執筆作品であることを意味していた。統一した主題の存在を指摘することは、結果として、執筆者が途中で変わるために劇の構成や文体に一貫性を欠き、不自然さが生じるといった諸説を退けることになったのである。

そしてこれ以後、Wilson Knight の影響を受けてか、『シンベリーン』に関する歴史的意味を問おうとする分析が数多く試みられることになる。¹³ またその一方で、20 世紀後半には、『シンベリーン』の執筆に関して、シェイクスピアの authenticity を疑う議論は、もはや中心的位置を失ったと言ってよい。それに代わって、この作品の持つ多様な要素を肯定的に捉えようとする傾向が見受けられるようになる。そして、作品の特質としての多様性に応ずるかのようにより、批評もまた、多様な観点と多様な分析、解説の試みが為されていく状況にある。

この小論では、G. Wilson Knight によって決着を見たと言われる、シェイクスピア単独執筆作品か否かを問う問題を新たに取り上げることにはしない。ここでは、登場人物の描かれ方に注目したいと考えている。Wilson Knight は歴史的観点から、主要人物であるポスチュマスとイモーゼンの二人が古代ブリテンの良き価値、“the goodness and integrity of Britain” を体現すると考える一方で、それはまた、イアチーモの体現する古代ローマの文化的、歴史的遺産ではあるが、恥ずべき悪しき遺産、licentiousness と対比させるべきものとして捉えている点を問い正そ

うとすることが、この小論の狙いである。

果たして、G. Wilson Knight が指摘するように、そのように単純な図式によって人物評を下してよいのであろうか？ イアチーモの中に見る licentiousness や、——とはいえ、救いのないほどに卑しく悪質なものではない——偽りや、毘とも言うてよいような策を仕掛けて人を欺き、己の利を得ようとする不道徳は否めないとしても、他方の側、即ち、彼に騙されてしまう者達、ポスチュマスとイモーゼンの二人を全くの善（goodness）であり、男女それぞれに備えるべき美德を、完璧な形で与えられた人物として評価することに問題はないのであろうか。中でも、ポスチュマスの場合、その美德とは何を指すのであろうか。それは、第三者の言葉による賞賛に過ぎない——そう極論してもよいほどに、劇中、彼自身の言動によって証しが得られる美德は殆ど見出すことはできない。又、ポスチュマスの妻イモーゼンについても、果たして、彼女のすべてが善であり美德の鑑であると言ってよいのか、疑いを抱かせる要素が幾つか見出せるのである。自己中心性の多分に強いポスチュマスを賞賛することしか知らぬイモーゼンの人間を見る目に、信頼すべき価値判断能力が宿るとするには、少なからず無理がありはしないか。更に、イモーゼンの父であり、ブリテン国の王であるシンペリーンの人格にも王たる資質を疑わせる言動が見られる。劇の始まりと終わりにおいて、さしたる変化を見せぬ彼の人格を思う時、我々は、「和解」の主題とそのことをどう関連させ、どう考えればよいのか戸惑いを覚えずにはおれない。

もう一つの問題点は、第五幕四場のポスチュマスの夢に立ち現われるジュピター神の予言の解釈である。G. Wilson Knight によれば、第五幕四場のジュピター降臨とその予言は、ポスチュマスとイモーゼンの結婚を祝福する言葉も含めて、下界（神の住まう天上界に対する下界）に住む者達に幸運な未来を約束し、祝福を与える証しとしての意味を持つ。しかし、果たしてその予言は、第五幕五場に至ってそのまま現実となって証しが立てられると考えてよいのであろうか？ 確かに表面的には、ジュピターの予言は現実となると解して問題はないに違いない。現に、ローマの将カイウス・ルシウスの伴う予言者 Soothsayer による絶対神の「予言」の謎解きは、神の意図が人間達の不和と別離の後に至る、「再会、和解」を祝福することにあったことを判明させる。しかしながら、現実には劇の終盤である第五幕四場、そして五場に至るまでの、人々の振舞いや言葉を思い返す時、終盤に至って再会した人々が交す言葉を果たして、真の和解を示すものと解してよいものか、疑わざるを得ない。劇の幕を降ろすのは、作品の題名ともなっているブテリンの王、シンペリーンの宣するローマとブリテンの和平である。だが、無知と傲慢の満ちたその言葉は、聴く者の耳を打つ時、信頼できる言葉を響かせるものとはいえない。それは、真に、両者の和解を永遠の価値あるものとなって、即ち、ジュピター神の予言を映す言葉となって響きわたるのか。その真偽を問い正す余地が残されているように思われるのである。

1. ポスチュマスの美德

序で触れたように、ポスチュマスの美德とは、第三者の讃辞として描かれるのであり、本人自身の言動が証しとなる美德は皆無に近い。

1. - (1) ポスチュマス： a good man

第一幕一場の冒頭、場面は古代ブリテンの王シンペリーンの宮殿である。二人の貴族紳士が登場し、王家の人々を包む或る悲しみについて噂話を始める。中でも、王自身の悲しみは並々

ならぬものである。

シンベリーンの顔を曇らせ、打ちひしがれさせるその原因は、親の望む結婚相手を拒み、名もなく財もない、従って未来もない乞食同然の男を夫に選んだ——しかも父の許可なく秘密のうちにである！——娘、イモーゼン王妃にあった。イモーゼンは、父シンベリーンが後妻に迎えた新女王の連れ子クローテンを激しく拒み、身分、地位以外のすべてにおいてより優れた男を夫に選んだのである。そして、その選択はどうやら、この貴族紳士二人の目にも正しい選択と映っていたようである。

First G. He[Cloten] that hath miss'd the princess is a thing
Too bad for bad report: and he[Posthumus] that hath her
(I mean, that married her, alack good man,
And therefore banish'd) is a creature such
As, to seek through the regions of the earth
For one his like, there could be something failing
In him that should compare. I do not think
So fair an outward, and such stuff within
Endows a man, but he.

(I, 1, 16-24. [] は筆者)

第一の紳士は、王女イモーゼンによって拒まれた男クローテンと、選ばれた男ポスチュマスとを比較している。ポスチュマスとは、クローテンの足元にも及ばぬ素晴らしい男、good manである。「あの男に匹敵する人格を備えた男はおらぬかと、ありとあらゆる国を訪ね、世の果てまでも探し求めたところで、見つけたと思った男には必ず、ポスチュマスには適わぬもの、何か足りぬものがあるに違いない。」第一の紳士の弁によると、ともかくも、彼の目に映る限り、ポスチュマスをおいて、あれほどの容貌の美しさ、起ち居振舞の見事さを備え、同時に、内に持つ美德も文句のつけどころのない男など、この世に存在しようとは思えぬ、と言うのである。

この言葉から察すると、引用文の冒頭にある“good man”とは、外観の美 (So fair an outward) と、内面の美 (such stuff within) 即ち、武将としてあるいは宮廷人としての美德という、二つの美を合わせ持つ理想の男を指すことが分かってくる。そして、この二つの美を備えた男の像こそは、作者シェイクスピアがポスチュマスの中に描こうとした人物像であると、G. Wilson Knight は考えたのであり、彼はシェイクスピアの重大な意図の一つがそこにあることを、読者、観客は受容すべきであるとも主張している。¹⁴

さてこのようにして、劇の冒頭に、第一の紳士の讃辞という形で語られるポスチュマス像は、外面の美と内面の美という二つの美を兼ね備える人物として、姿なき登場を果たすのである。そしてこの美德は、この後に続く二人の紳士の対話の中に紹介される新たな利点によって、更に高められることになる。

1. ー(2) 父シシリウス：勇猛なる武将

第二の紳士の求めに応じて、第一の紳士が語り始めたのは、今は亡きポスチュマスの父シシリウスが、そして兄二人が如何に勇猛果敢な武将であったか、その闘いぶりについてであった。また、その働きに報いてか、その後孤児となった赤子ポスチュマスを（父テナンチウスの後を襲って）王位に就いたシンベリーンが引き取り、宮廷内で養育し寵愛したこと、また、長じて

ポスチュマスは、老若いずれからも敬愛される美德の士となったことなど、話の内容は、ポスチュマスがその血を引く、レオナータス家の歴史と言ってよかった。こうして、ポスチュマスの体内を流れる血が、ブリテンの歴史に輝かしい武勲を残した武将のものであることを、第三者の口を通して語らせるその意図は、王妃から愛を報われる価値など露ほどもない、卑しい輩と蔑まされることが、実は理不尽な誹謗ではないかと、或る種の同情を読者、観客の中に醸し出す意図が働いているかもしれない。また、天涯孤独という不運の星の元に始まったポスチュマスの生は、シンベリーンの寛大に救われ、一度は幸運に転じるものの、今再び、王妃イモーゼンに愛されたがために国外追放という、救いのない不運に見舞われたのである。このいきさつもまた、人々の感情に訴え、哀れを誘うはずである。

ポスチュマスは、決して卑しいとは言えぬ、むしろ誇りにしてよい祖の血を受け継ぎ、更に、王の慈悲の賜物であるには違いないが、宮廷で受けた最高にして最善の教育は、彼をまさしく美德の士に育てていたのである。

First G. [Posthumus] liv'd in court,
(which rare it is to do) most prais'd, most lov'd;
A sample to the youngest, to th'more mature
A glass that feated. them, and to the graver,
A child that guided dotards. To his mistress,
(For whom he now is banish'd) her own price
Proclaims how she esteem'd him; and his virtue
By her election may be truly read
What kind of man he is.

(I, 1, 46-54. [] は筆者)

引用文の前半には既に触れた通り、宮廷の人々は老いも若きも一様に、ポスチュマスに対して親愛の情と、尊敬或るいは信頼を寄せられていたことが述べられている。だが、それ以上に興味深い内容を含んでいるのは、引用の後半部分である。イモーゼンとの愛がポスチュマスにとってどのような変化をもたらしたのか、どのような新しい意味を加えることになったのか。語り手は断言する——イモーゼンの愛を獲得したことこそは、ポスチュマスの価値を高めた。何故ならそれは、宮廷内において他の誰から愛され、親しまれるよりも、あるいはまた、信頼され、手本とされるよりも、遥かに確かな証しとなってポスチュマスの美徳が真のものであることを保証するからである。なるほど、イモーゼンの愛は、彼に国外追放という予期せぬ禍いをもたらした。しかし一方で、王妃イモーゼンもまた、父王の不興を買い幽閉同然の苦境に追われたのである。しかも、それでもなおポスチュマスを愛し続ける覚悟だというのであるから、それを聞くだけで、王妃が如何にこの男の、人としての価値を高く見定めているかが分かるというものである。仮にポスチュマスの（真の）値打ちを知らぬ者でも、このようにして王妃に選ばれた男であることを知れば、その場で、彼の美徳に脱帽するであろう。ましてや異論を言い立てる者などあるまい。

こうして、劇の冒頭、ポスチュマスの美德は固有名詞をもたぬ一人の貴族の口を通して語られ、疑うことのできぬ前提として示され、物語は進展し始めることになる。しかしながら、この前提となったポスチュマスの美貌は、この後、彼自身の言動との矛盾によって、また劇中の他の人物の批判的な人物評によって、次第に翳りををみせてくる。

2. ポスチュマス： 美德の騷り

第一幕の冒頭から、理想の美德を備えるが故に、人々の賞賛を受ける人物として紹介されるポスチュマスであるが、ブリテン国から大陸へと舞台が移ると、第三者のポスチュマス評も賞賛一色というわけにはいなくなる。

2.-(1) イアチャーモの皮肉な目

第一幕五場、国外追放の身となったポスチュマスは、知人フィラーリオの屋敷のあるローマに向かう。フィラーリオは、亡き父シシリウスが生前親交のあった人物である。当のポスチュマスが姿を見せる直前、フィラーリオの友人の一人イアチャーモが、英国でかつて見かけたことのある男の値ぶみをしている。

Iach. Believe sir, I have seen him in Britain; he was then
of a crescent note, expected to prove so worthy as
since he hath been allowed the name of. But I could
then have look'd on him without the help of admiration,
though the catalogue of his endowments had been tabled
by his side and I to peruse him by items.

(I, 5, 1-6)

かつてブリテンに渡った折に見かけたポスチュマスなる男は、運命の女神の後押しを受けてか、未来の運勢は確かに上向きであり、人々の賞賛に値する美德を備える人となるべき期待を担っていた。しかし、イアチャーモ自身は、多くの人々とは少しばかり違った目をもってポスチュマスを見ていた。賞賛に値する資質を認めはするが、手放して誉めるわけにはいかぬと言うのである。この言葉を制するかのように、フィラーリオはイアチャーモの目にしたという当時のポスチュマスに比べて、時を経た現在の彼は内面、外面、いずれの美德にも磨きをかけ、遥かに優れた魅力を放っていると弁護する。

しかし、イアチャーモはなお反論して、ポスチュマスに与えられている美德の誉れも、実は怪しむべきところがあると、なかなか懐疑的である。

Iach. The matter of marrying this king's daughter,
wherein he must be weighed rather by her value
than his own, words him (I doubt not) a great
deal from the matter.

(I, 5, 12-15)

引用文中には、‘matter’ という語が二度用いられているが、それぞれに意味が異なる。第一行目の‘matter’はfact——起こったこと(what has happened)といった意味であり、第四行目の‘matter’は一時性、一過性の強いfactと違って、truth, realityに近い意味を持つ。具体的には、ポスチュマスの(人の噂にのぼる美德即ち、讃辞ではなく)美德の真価を指し指す意味でのmatterである。

イアチャーモは、ポスチュマスという男は、王妃イモーゼンとの結婚によって真実の価値以上の価値を与えられ、必要以上に高い評価と賛美を受けているのだと、そう主張して後には引

かない。彼によれば、ポスチュマスの美德とは、彼本来の価値の為せるわざではなく、王妃の王妃たるが故にイモーゼン自身が帯びる価値によって押し上げられ、本来の価値以上の価値の高さまで高められたに過ぎぬ。¹⁵（イモーゼンに直接あったことのないイアチーモであるから、身分や地位とは関係なくひとりの女性として見た際の、イモーゼンの価値評価は未知であり、引用文第二行目“her value”は“her value of being king's daughter”と解するのが適切と思われる。）

そして、イアチーモは更に興味深いポスチュマス評を加えている。引用には挙げていないが、彼は、人々が二人の別離を嘆くことによって、その禁じられた秘密結婚を容認し、支持したことになると。そしてまた、そのような世人の好意的態度は、ポスチュマスの値打ちを一層高める結果になったのではないか。また一方では、王妃イモーゼンの自己の選択に対する自負心を強め、愛を貫く決意を強めたのではないか。仮に、イアチーモの穿った見方が的を得たものであるならば、ポスチュマスは意図せずして、そして努力せずして、美德の誉れを高めたことになる。与えられた状況が、当人の預かり知らぬところで新たな「福」を呼び込んだのである。

無論のこと、ポスチュマスの美德に関する懐疑的評価には、確たる根拠があるわけではない。しかしながら、幸運な男に対する羨望と妬みの感情が語らせる、冷やかな人物評価かと思わせる、イアチーモのこの言葉も、実は、いくばくかの真実味を次第に帯びてくるのである。その変化は、この直後に起こる。我々のポスチュマスを見る目が際立って変わり始めるのは、彼が、イモーゼンの貞節をめぐる「賭け」の誘いに応じる時を境にしてのことである。イアチーモの巧みな誘惑を受けた結果だとはいえ、妻の貞節を賭事の品に献上するとは、愚かしいばかりか品位ある振舞とは到底言えまい。この、うかうかとした愚かしさと卑しさを目のあたりにする時、我々は、ローマに到着したばかりのポスチュマスを皆に紹介するフィラーリオの言葉がにわかに甦り、皮肉を帯びた響きを伴って聞こえてくるはずである。

Phi. I beseech you all be better known to this gentleman,
whom I commend to you as a noble friend of mine.
How worthy he is I will leave to appear hereafter,
rather than story him in his own hearing.

(I, 5, 29-32)

この時、フィラーリオの意図は当然のことながら、ポスチュマスを立派な紳士としてイアチーモを始めとする数人の友人に紹介することにある。“a noble friend of mine”という表現からそのことは明白である。しかし問題はその後が続く言葉である。フィラーリオは、自分が言葉によって長々とポスチュマスの人柄を、しかも当人の前で誉めたてより、「その人となりがどれほど立派なものであるか（How worthy he is）は、自ずと、当の本人の言葉、振舞いから立ち現われる（appear）のを待つことにしたい。」と、そう言葉を結んで、はるばる海を越えてやってきた客人の紹介を終えるのである。フィラーリオの用いた appear という動詞は、彼の意図の通りに理解すれば、文字通りに、「人や物の姿があるがままに表に現われる」という意味を表わす語となる。しかし、ポスチュマスの或る愚かしさを目撃した者の目には（あるいは耳と言うべきか）この appear という語が、「なるほど、見かけは噂通りの立派な御仁に見受けられるが（appear）、それはどうやら全くの見かけだおし（appear）であるらしいわい。」と、そのような意味に変様してくるのである。外観は確かに“worthy”であるかに見える（appear）が、実体、即ち外観の内側に隠された真実の姿は別ものである——そのような二重の意味を含んだ語

として耳に響き、目に映ってくるのである。そして、当然のことながら、「立派な」「高潔な」といった意味を表す語、worthy もまた、皮肉を帯びた言葉となり、むしろ、unworthy の響きさえ奏でるかもしれぬのである。

こうして、劇の始まりはポスチュマス賞賛であったものが、早くも彼自身の言動によって翳りをみせることになる。

2.-(2) ポスチュマス： 愚かなる善の人

フィラーリオの屋敷に姿を見せたポスチュマスに会った、その当初から、おそらくイアチャーモは彼の指に光るダイヤモンドの指輪に目を留め、誘惑を感じていたのではないか。居合わせた男たちの間で話がそれぞれの国の女性の美に及び、やがて、「我が妻の美德に並ぶもの世になし」と誇るポスチュマスの妻イモージェンの貞操をめぐる賭事へと発展していく。その時、賭けの相手イアチャーモの頭の中には、或る確信に近い懷疑、「濁りなき貞操」への疑いと、賭けに勝利する目算があったに違いない。善なる人ではあるが故に浅薄なる人でもあるポスチュマスの目を欺くことなど、ほんの少し策を弄すれば造作もないことと彼の目には映った。

賭けの条件は、ポスチュマスの妻の貞操とダイヤモンドの指輪、それに対して、イアチャーモの差し出す一万ダカットの金である。この賭けの取決めは、イアチャーモの提案によって口約束ではなく、公証人 (lawful counsel) の立会いの元に法的な拘束力を持つ契約となる。イモージェンの貞操をめぐる賭けは、商取引となったのである。ここに至って、ポスチュマスは自分の言葉を自身で欺くことになる。彼は、ほんの少し前まで、イモージェンの美德は金銀財宝とは違って、貨幣をもって調達することなどできぬ、神の賜物であると誇ったはずであった。ポスチュマスは、無自覚に「神の賜物」を「賭け」という戯れ事に投じてしまうだけではなく、更に、やはり無自覚に、賭けの契約を交すことでその神の賜物を世俗の商品に変えてしまうのである。それは、二重に妻の美德の神性を汚すことであった。

さて、ブリテンに渡ったイアチャーモは、イモージェンの寛大さにつけ入って彼女の部屋に忍び込み、首尾よく貞操喪失の証しを手に入れて意気揚々とローマに帰ってくる。但し、彼はイモージェンの貞操そのものに食指を延ばすことはない。イアチャーモがポスチュマスに差し出す「証し」は、姿、形のあるもの、ないものを含めて五項目ほどあるが、ここではその内、第四、第五の証しを取り上げることにする。

2.-(2)-a. 'bracelet'

第二幕四場、仕事を済ませてローマに帰ってきたイアチャーモは、ブリテンの宮殿内のイモージェンの寝室の描写を事細かく再現してみせる。彼の告げる部屋の装飾は、どれもポスチュマスの良く知るものと食い違うものは何ひとつなく、イモージェンの寝室の中に入った者でなければ知るはずのないものばかりであった。しかし、それは貞操喪失そのものの証しとはならない。問題はイモージェン (比類のない美德、貞節) 自身が無事か否かなのである。思わず、ポスチュマスは "This is her honour!" と苛立たしく叫ぶ ('honour' という語は、女性の美德を指す語として用いる時、'chastity' 即ち「貞節」と同義となる)。

そこでイアチャーモが取り出したのが、第四の証し、bracelet である。それは記憶に頼る証しではなく、姿形を持つより確かな証しである。何故なら、形あるものは否定し難い力を持つからである。

引用文の冒頭、イアチーモの言葉の中に四度出てくる代名詞“it”はbraceletを指す。イモージェンは自分の意志でその白く美しい柔肌の腕から「腕輪」をはずし、惜し気もなくイアチーモに与えたというのである。彼女は、異郷に旅立つポスチュマスが“a manacle of love”と言って手渡した、堅く永遠の絆を刻印する愛の鎖を自ら振りほどいたのである。「一度は、大切にも、いとおしくも思った腕輪。でも、今はもう、かつての輝きは失せてしまった……」ポスチュマスは、夫である自分に渡して欲しいと思って、腕輪をイアチーモに託したのではないかと言葉をはさみ、望みを捨てまいとする。しかし、手紙でそう言ってきたのか、と問い返されるともう抵抗できず、投げ出すように、「この指輪持っていくがいい」と、吐き捨てるように言い放つ。ポスチュマスは、妻の不貞を半ば、いや、おおむね信じてしまうのである。そして、妻の裏切りに対して報復するかのように、イモージェンの贈った愛の証し、ダイヤモンドの指輪を自分の指から抜き取って、イアチーモに与えてしまおうとする。あまりの性急さに驚くフィラーリオが翻意を促すが、「神の名において」と、イアチーモが誓いを立てるや、たちまち屈してしまうポスチュマスである。

(II, 4, 121-130. [] は筆者)

潔」の美德に対する過度の信頼と同様、時として浅慮な判断となる。¹⁶

実は、イアチャーモはここで二枚舌を使っているのである。嘘と事実の二つを込めて言葉を使っている。その点が先の引用に引いた証言と異なるところである。「腕輪」を手に入れた時の模様を語る前述の証言——“She stripp’d it from her arm” (II, 4, 101) は真っ赤な嘘である。事実は、深い眠りの中にあるイモーゼンの腕から、盗人よろしくそっと「腕輪」を抜き取ったのであり、“she stripp’d it” とは決して言えぬはずである。ところが、“By Jupiter” に始まる第二の証言では、“I had it from her arm” と表現を変えている。しかも敢えて曖昧な表現に変えてしまうのである。何故、曖昧かといえば、一つの文（表現）で二つの意味を同時に表わすからである。そして曖昧な言い回しにする意図は、“By Jupiter” の誓言と矛盾しない意味を含ませるためである。イアチャーモの第二の証言の言葉“I had it from her arm” の伝えるひとつの意味は、“I received it as her gift stripped from her arm by herself” とでも言い替えることのできるものであり、前述の証言と変わらぬ意味となる。それは、ポスチュマスが理解し、信じた意味でもある。そしてもう一つの意味は、“I took it secretly from her arm while she was sleeping” と言い替えことのできる意味である。言うまでもなく、二つ目の意味は必ずしも偽りとは言い切れぬ言葉となっていることがわかる。この時、鍵になるのは動詞“had” (have) である。イアチャーモは、複数の意味を表す事のできる動詞を用いて意図的に曖昧な、二重の意味を含んだ表現に変えたのである。聞き手のポスチュマスは（イアチャーモの）狙い通りに、イモーゼンが自分で腕輪を外して見知らぬ男に与えたと、前にもまして信じ込み、イアチャーモ自身は神の前で嘘偽りを語る重い罪を免れたのである。善ではあるが愚かしき人、ポスチュマスにその二枚舌を見抜くことはできない。

しかし、我々がそれ以上に見過ごしてならないのは、引用文の後半には、ポスチュマスが妻イモーゲンよりも、その侍女達を信頼しようとする態度が窺えることである。彼は、主と主家に対する忠誠の誓いを立てて仕える侍女が、見知らぬ異郷の珍客が懇願するからといって、（おそらく買取するであろう）主人であるイモーゲンを歟き、腕輪を手渡すことなどあり得ぬ話だと言って、即座にフィラーリオの仮説を退けている。侍女の忠誠の誓いは永遠のものであるが、美徳の誉れの高い妻イモーゲンの愛の誓いも、貞節の誇りも簡単に捨て去られるものというわけであろうか。こうした不信は、イモーゲンひとりに対する不信ではなく、自分自身に対する不信ともなり得ることをポスチュマスは気付いているであろうか。おそらく気付いてはいまい。気付いていないからこそ、自分の愛した女を「多情な本性」であると決めつけ、*whore*（Ⅱ, 4, 128）の名で呼んで蔑しめるのである。ポスチュマスは、父王の不興を買い、四面楚歌の中、愛を貫こうと決意したイモーゲンの真心を早や、忘れてしまったのである。

2. — (2) — b. 'a mole'

さてこうして、イモーゼンの不貞が動かぬ事実と信じて、今や絶望の淵に追われたボスチュマスであるが、その留めを刺すかのように、イアチーモは最後の証しを差し出すのである。

Iach. If you speak
For further satisfying, under her breast
(Worthy her pressing) lies a mole, right proud
Of that most delicate lodging. By my life,
I kiss'd it and it gave me present hunger

『シンペリーン』：美德の鑑は翳りなき美の鑑か

To feed again, though full. You do remember
This stain upon her?

(Ⅱ, 4, 133-139)

生み育てた親は別格として、夫以外に知る者のいようはずもない、胸元のほくろ。イアチーモは、妻イモージェンのほくろの在りかを知ったばかりか、その上に接吻さえたというのである！そして、その接吻が新たな刺激となって、すぐにもう一度接吻を欲してしまったとさえ言い放つ。しかも、先の接吻でもはや堪能したというのにである。ここでは、“kiss’d”という動詞は単なる接吻という行為を示すのではなく、情欲のすべてを満たす行為を象徴する言葉ともなっている。それは、後に続く“present hunger”や“though full”といった言葉がそうした連想を促すからである。

この最後の証しとなる第五の証しは、室内の装飾や腕輪の場合と違って、非常に強く性的な連想を誘うものとなっている。「ほくろ」ひとつを描写する言葉が、あたかもイモージェンの肉体のすべてを描写するかのような力を持つため、聴き手であるポスチュマスの脳裏には、イモージェンの美しい肢体が絵のように浮かび上がってくるのである。「ほくろへの接吻」によっては、ポスチュマスは愛を喪失した怒りに加えて、激しい嫉妬の炎に包まれるのであった。

Post. O, that I had her here, to tear her limb-meal!
I will go there and do't, i'th'court, before
Her father. I'll do something.

(Ⅱ, 4, 147-149)

嫉妬にかられたポスチュマスは復讐を誓わずにはおれない。「今ここに、目の前にイモージェンがいるとしたら、わし掴みにして八つ裂きにしてくれるのに！」仮に今、それが叶わなずとも、何とかしてブリテンに戻り、シンペリーン王の目の前で必ずや八つ裂きにしてやる。このままでは済ましてなるものか。ポスチュマスはイモージェンを生かしてはおかぬと、復讐の覚悟が単なる言葉ではないことを窺わせる。そしてこの後、引用文の末尾“do something”とは、忠義者の召使ピサーニオに命じるイモージェン殺害計画となって現われる。

女の貞節は女の存在の意味のすべてであると言っても過言ではない。そうであるからこそ、こうしてポスチュマスの例に見るように、妻の貞節の喪失は愛の喪失を意味し、女の全存在が汚辱に満ちたものに急変質し、すべてが無に帰するのである。chastityなくして、love-token (の交換) など何の価値も持ち得ない。美しく汚れなきものを象徴する言葉 chastity とは、一つの美德の名であるが、実体は性的欲求の対象としての女の肉体の価値を象徴する言葉と言ってよい。少なくとも、劇中のポスチュマスやイアチーモの女性観に関してはそうである。

2.一(3) ポスチュマス： 女性呪祖／悪の根源

イモージェンという個別の女に対するポスチュマスの呪いは、女性一般への呪祖へと発展する。第二幕四場の終わり、「必ずや目にも見せてくれる」と妻の裏切りに対する復讐を誓って退場したポスチュマスが再び姿を見せ、独り語りを始める。

Post. Is there no way for men to be, but women
Must do half-workers? We are all bastards,
And that most venerable man, which I

Did call my father, was I know not where
When I was stamp'd. Some coiner with his tools
Made me a counterfeit: yet my mother seem'd
The Dian of that time: so doth my wife
The nonpareil of this. O vengeance, vengeance!

(Ⅱ, 4, 153-160)

引用文冒頭の二行は、ハムレットの、自己の出生の忌わしさを想像して呪祖する言葉を思い起こさせる一文である。¹⁷ 女の腹から生まれた者はすべて“bastard”の運めを負うのか？ この時ポスチュマスは、貞節の鑑と信じる妻イモージェンの不貞を知ったことが原因となって、実母の貞節を疑い、更には、不貞に走らぬ女などおらぬ、とすべての女性の貞節を疑う——短絡した結論の引き方である。

しかしながら、この時のポスチュマスとハムレットとの間には、明らかな相違点のあることを忘れてはならない。ハムレットには己の生を呪う具体的な原因が確かにあったはずである。それは、実母ガートルードの不可解なまでの性急な再婚である。亡き父、先王ハムレットの弟ながら、父とは天と地ほどの差もあろうかと思わせる叔父クローデウスと母の再婚は衝撃であり、そのおぞましさに——当時、こうした結婚は近親相婚とみなされた——ハムレットは身震いする。母の不実と多情を嫌悪し、身震いする。人間の命とはこのようにして、本能 desire の落とし子としてこの世に生まれるものなのか…… ハムレットは、女を懷疑し、愛を懷疑するに至るのである。

ところが、これに反してポスチュマスの女性懷疑や呪祖は、確固たる根拠を欠いている。あるのは、イアチーモの言葉による（イモージェン不貞の）証言だけである。しかもそれは、偽りと知らぬまま信じた根も葉もない「不貞の噂」に等しい証言である。そうであるにも関わらず、己の生を呪い、女を呪うのはあまりに浅慮ではないか。ポスチュマスが、人間の手を染めるありとあらゆる悪と罪を挙げて、そのすべての根源は女にあるのだと、声高に叫べば叫ぶほど、その言葉は白々しく響くばかりである。

しかも彼は、女性への懷疑と呪祖の発端となったイモージェンに対する復讐をあれほど誓いながら、己自身の手を汚して決行するわけではなく、従者ピサーニオに強要する。忠誠心に厚いピサーニオが主人であるポスチュマスの命令に背くことはできぬはずだと、そのことを頼みに、主人の妻殺しを強いるのである。（但し、ピサーニオはこの理不尽な命令には従わない。）この傲慢と無責任を目にする時、誰もこの男の「美德の誉れ」は地に落ちたと感じるであろう。それに反して、主人といえども、その命令に盲目的に従うだけではなく、主人に過ちあればそれを見抜く力を持つピサーニオ、拒むべきものを拒む勇氣と決断を見せるピサーニオの姿は、一層、ポスチュマスの卑小さを印象づける。

ピサーニオは、“Wherein I am false, I am honest; not true, to be true.” (Ⅳ, 3, 42) と言って、自分の心が正しいと命ずる道を選択し、イモージェンの命を救うのである。彼は、それが一時的には主人を欺くことになっても、後には、主人を救い、自分の忠誠の務めをまっとうする道だと信じていた。ポスチュマスの従者であるピサーニオは、なるほど身分、地位は主人に劣るものの、その内面（精神）は主人に比して遥かに高潔であると言わねばなるまい。彼は、真の忠誠心とは何であるかを知る人でもあった。

2.一(4) ポスチュマス： 悔い改め／死の願望

第五幕一場の冒頭、ポスチュマスは一枚の血塗られた衣の切れ端を手に、耐えがたい喪失感と悲しみを吐露する。その布の切れ端は、ピサーニオから送られてきたものであった。

Post. Yea, bloody cloth, I'll keep thee: for I wish'd
Thou shouldst be colour'd thus. You married ones,
If each of you should take this course, how many
Must murder wives better than themselves
For wrying but a little? O Pisanio,
Every good servant does not all commands:
No bond, but to do just ones. Gods, if you
Should have ta'en vengeance on my faults, I never
Had liv'd to put on this : so had you saved
The noble Imogen, to repent, and struck
Me wretch, more worth your vengeance.

(V, 1, 1-11)

ポスチュマスの願いは、血のりの付いた布が物語る通り、イモージェンの死（殺害）が覆すことのできぬ事実と知りつつ、その命を神の力にすがって甦らせることである。イモージェンの蘇生を願うのは、彼女が人として、又、美德の点において、夫である自分より遥かに優れていると信じるからである。敬愛する妻を殺すことは神の意に反する罪であった。彼は、己の非を悔い、命に代えて妻の命の甦ることを願う。しかしその一方でポスチュマスは、妻の不貞の疑いを捨てたわけではなかった。

引用文第四行目“wrying but a little”とは、文字通りには「ほんの些細な過ち」を冒すことという意味であるが、ここでは具体的には、女による不貞のことを指している。「女の「不貞」などという、取るに足りぬ過ちにいちいち腹を立てて（自分と同じように）妻を殺していたのでは、世の夫たる者、どれほどの数の男が妻殺しに手を染めることになるか。」しかも、ポスチュマスによれば、殺される女の方が夫よりも数段優れた人間なのである。仮に、その女達の命を奪うとすれば、それは神意に背く罪に違いない。引用文前半の注目点は、ポスチュマスの変様である。第二幕四場で「復讐」の誓いを口にした男の姿はここにはない。“wrying but a little”という言葉がそのことを端的に表している。あれほどに、嫌悪し侮蔑したはずのイモージェンの冒した罪、いや、裏切りを今、「ほんの小さな、咎めるほどのこともない過ち」と呼んで見過ごそうとしているのである。女にとっておそらく最も耐え難い言葉、“whore”の名で彼女を呼んだことも忘れたかのようである。その理由は、想像を上回る喪失感と孤独感ではなかったか。姿、形を持ったイモージェンを現実に見失って初めて知る、その喪失と孤独は「裏切り」に怒り狂ったあの瞬間には、まったく予期もしなかったことに違いない。ポスチュマスの変様は、突然襲った喪失と孤独の苦しみに耐えかねて、思わず手を延ばした妥協の変様である。ポスチュマスは、世に横行する「不貞」の悪弊から妻イモーゲンだけは免れていると信じ、誇りに思うことをもはや放棄する。世に横行するが故に「些細な罪」でしかない不貞には目を閉じ——それは今となっては、さしたる苦痛ではない——イモーゲンが傍らに在る喜びを再び我が手に取り戻したいと願うのである。

ポスチュマスの改悛とは、イモージェンの殺害そのものを悔いるというよりは、彼女の死が

もたらした苦しみ——喪失と孤独——があまりに耐え難いために、イモーゼン殺害を悔いるのであって、いわば、自己中心の理由から発するものである。自分を襲った喪失感と孤独感から逃れようとして、イモーゼンの過ちはなきに等しいものとして見過ごそうと言うのである。従って、ポスチュマスが妻イモーゼンに「不貞」行為の事実があったことを疑っている点は、何ら変わっていないことを忘れてはならない。変わったのは、それが「死」を報いるほどの罪とは考えなくなった、いや、やむなくそう思うよう自分に強いた、ことである。

そして興味深いのは、引用文の末尾にある“so had you saved /The noble Imogen, to repent”という一節である。ここに“to repent”という小さな言葉があるために、イモーゼンの蘇生がイモーゼン自身の悔い改めを願ったものでもあることが分かる。ここにも、彼女の「不貞」は動かしがたい事実だと信じるポスチュマスの本心が顔を出している。ただ、イモーゼンの悔い改めといっても、復讐を意図して「改悛」を強要し、罪を裁こうというのではない。ポスチュマスの胸中にあるのは、神の助力によって、死の世界から甦ったイモーゼンが「自ら悔い改め」二度と同じ過ちには陥りませぬように、というささやかな願いである。

さてこうして、イモーゼンの蘇生と引替えに自己の死を願うポスチュマスであるが、自分にふさわしい死に場所を求める姿には、自己中心など忘れた雄々しささえ感じさせるものがある。ローマの皇帝アウグスタス・シーザーに抗うブリテン軍に身を投じ、名もなき戦士の装いながら、命知らずの奮闘でイモーゼンの父シンベリーンを救う。又、戦場に己の死に場所なし、と見るや、一転イタリア人の衣に身を隠し、敢えてブリテン軍の捕らわれ人となって獄死することを願うのである。この真摯に「死」を求める姿を見る者はおそらく、やはりポスチュマスの中には、美德の誉れの証しとなるような一面があったではないか、と感慨するかもしれない。しかし、それも束の間、シンベリーンの意向を携えた使者が牢を訪れ、鎖を解こうとするや、ポスチュマスは一転、歓喜の声をあげるのである。

Mess. Knock off his manacles, bring your prisoner to
the king.

Post. Thou bring'st good news, I am call'd to be made
free.

(V, 4, 193-196)

使者の到来する直前まで、「死ぬ覚悟はできているか」と問う牢番に答えて、「とうの昔に覚悟はできている。肉なら、さしずめ焼過ぎて黒焦げといったところさ。」と、泰然とその時を待つ、とでもいったふうのポスチュマスであった。ところが、“knock off his manacles”の声に、一瞬の躊躇もなく「慶き知らせ」と応じて、生への帰還を諸手をあげて歓迎するのである。「死」への願望は胡散無消してしまう。この一貫性のなさを見せつけられては、もはや先の感慨など幻となり、以前にもまして、ポスチュマスなる男は honour や nobleness といった美德とは程遠い人物とみなすよりほかはない。

にもかかわらず驚くべきことに、その一方で、このポスチュマスになお讃辞を贈る人々が一度ならず二度も、いや三度に渡ってこの後にも登場するのである。まず初めは、第五幕四場（ポスチュマスの）夢に立ち現われる亡き父、二人の兄、そして母の贈る讃辞である。更に、第五幕五場、ポスチュマスを騙した己の非を悔いるイアチーモ、そして、互いを誰であるか知らぬまま、共に激戦を闘いブリテン王シンベリーンを救ったベラーリアスからも、その善良、高潔、勇猛果敢を絶賛されるのである。彼らの意図に偽りなく、彼等の言葉に一面の真実が仮にあっ

たとしても、ポスチュマス自身の言動とは相入れぬところが数多くある限り、やはり、その讃辞が虚ろな響きと聞こえてもいたしかたはあるまい。

3. イモージェンの美德

前章で明らかになってきたことは、ポスチュマスの実像は、彼に与えられる賛美とは必ずしも一致するものではないことであった。それでは、そのポスチュマスを唯一の人として愛し、父王シンベリーンの意に背くことになってもなお、愛し続けるという選択をした王妃、イモージェンの美德についてはどうであろうか。彼女の場合には、果たして、第三者のイモージェン評と彼女自身の言動との間に矛盾や食い違いは現われてこないのであろうか。あるいは19世紀の批評家達の示した女神信仰に近い崇拜や、一転して“nothing but a puppet”といった酷評に代表される20世紀前半の否定的なイモージェン観に代わる見方は出てくる可能性はあるのだろうか。

3.-(1) イモージェン： 独立、自尊の人

ブリテンの王シンベリーンにとって、娘イモージェンとポスチュマスの結婚（秘密結婚）は予期せぬ裏切りであった。シンベリーンは、ポスチュマスの亡父シリウスの功を思えばこそ、孤児となったポスチュマスを宮廷に引取り、養育したのであった。王妃を許可なくして奪うことは、その異例の慈悲に対する亡恩の行いに他ならない。国外追放の罰は当然の報いであったかもしれない。シンベリーンの思惑には、別離は愛の情熱を冷却させ、ポスチュマスの記憶も次第に薄れていくであろう、そのような期待があったに違いない。だが、イモージェンの思いは違っていた。第一幕二場、追放の身となってローマへと旅立っていくポスチュマスと別れを交すイモージェンは、再会の約束を夫に誓わせようとして十分には果たせない。途中で父シンベリーンがその場に現われたのである。夫が立ち去り、その場に独り残されたイモージェンは、毅然と父に反駁する。

Cym. O disloyal thing,
That shouldst repair my youth, thou heap'st
A year's age on me!

Imo. I beseech you sir,
Harm not yourself with your vexation,
I am senseless of your wrath: a touch more rare
Subdue all pangs, all fears.

Cym. Past grace? obedience?

Imo. Past hope, and in deapair, that way past grace.

Cym. That mightst have had the sole son of my queen!

Imo. O blessed, that I might not! I chose an eagle,
And did avoid a puttock.

Cym. Thou took'st a beggar, wouldst have made my throne
A seat for baseness.

Imo. No, I rather added

A luster to it.

Cym.

O thou vile one!

(I, 2, 62-74)

引用文第一行目、シンベリーンの言葉に見られる“dislyal”という語は、disobedient に等しいものと考えてよい。家長の力を絶対とする時代にあって、王を始めとする主人の意向、父親の意向は拒むことのできぬ絶対命令であった。それを拒み、敢えて名もなく、財も未来も持たぬ男を夫としたイモーゼンはまさしく、disloyal daughter である。娘の親不孝に苦しめられた王は、急に老いを感じていた。冒頭の“O disloyal thing”とは、怒りと悲しみを込めた叫びである。

ところが、イモーゼンはその言葉にひるむことなく、反論する。「あなたがどれほど怒り狂ってみせようとも、私は少しの痛みも感じません。もう一つの苦しみに比べれば、私を動かす何の力もありませんもの」彼女にとって、ポスチュマスとの別離はどんな苦痛や不安も凌ぐ悲しみなのである。反省の色のない娘の態度に、シンベリーンは再度不服従、不従順——女にとって、子にとって最大の罪である——の罪を責める。すると、前にもまして挑戦的な言葉で応酬するイモーゼンである。「(従順の教えを忘れたかとおっしゃるけれども)忘れられ、捨て置かれているのは私の方です。「希望」というものに見放され、今絶望の淵に立つ私は、それ故に人の道、女の道として教えられた美徳など忘れてしまいました。」

引用文後半は、ポスチュマスを選んだことは、イモーゼンは地位も財も持たぬ無一物同然の男に嫁したことを意味したのであり、父親であるシンベリーンの玉座を卑しく汚れたものに蔑しめたと非難する父に対して、「とんでもない。それどころか、むしろ宝石の原石が磨かれ、秘められていた輝きを放ち始めるように、王家にポスチュマスが加わったことで、シンベリーンの玉座は輝きを増したはず」と言っているのけるのである。ここには、イモーゼンの自己の選択に対する自負が表れている。それは、誇り高い自負心である。

こうして、誇り高く、この選択の正しさをひるむことなく主張するイモーゼンの姿に、父ブラバンショウの激怒の前にしながら、やはり堂々と、父親への恩義を選ぶよりはオセロウへの愛を選ぶと表明した、あのデズデモーナの姿を重ねて見る者は少なくないであろう。しかし、今ここで父と対決するイモーゼンは、デズデモーナ以上に強い自我と信念をもつ人であるかもしれない。何故なら、愛を阻もうとする力に抗うとき、デズデモーナの傍らにいたオセロウに代わる存在は、もはやないからである（愛する男は旅の空である）。イモーゼンはデズデモーナとは違って、四面楚歌の中、孤軍奮闘を強いられていた。そして、己の信じるものを守るために必要とあれば、伝統的美徳を捨て、独立した自我をみせることのできる人であった。このイモーゼンを見る限りでは、我々は彼女を指して“nothing but a puppet”と評した E.K. Chambers の言葉に同意するわけにはいかない。¹⁸ と同時に、伝統的美徳の鑑であるが故に、女神信仰に似た讃辞をイモーゼンに贈る 19 世紀批評家に組することも承服できかねる。ここに見るイモーゼンは、忍耐、貞淑、貞節、従順といった美徳の真実だけでは表しきれぬ、別の資質を感じさせるものがある。

そして、この強い自我の印象は、「賭け」での勝利の目算を胸にローマからやってきたイアチャーモを前にした時も変らぬものである。イアチャーモの誘惑に遭ってポスチュマスへの愛と信頼が揺らぐことはない。第一幕七場、召使ピサーニオの案内で王妃イモーゼンの前に a noble gentleman of Rome として現われると、イアチャーモはポスチュマスの快楽に満ちたローマでの生

活（無論、作り話である）を親切心よろしく伝える。そのポスチュマスに、ひとつ軽いお仕置きをするつもりで仕返しをしてやってはどうかと、浮気を勧める。イアチャーモの狙いは、イモージェンの貞操である。「イモージェン陥落」はダイヤモンドの指輪の獲得も保証してくれるはずであった。

Iach. Let me my service tender on your lips.
Imo. Away, I do condemn mine ears, that have
So long attended thee. If thou wert honourable,
Thou wouldst have told this tale for virtue, not
For such an end thou seek'st, as base, as strange.
Thou wrong'st a gentleman, who is as far
From thy report as thou from honour, and
Solicits here a lady that disdains
Thee, and the devil alike. What ho, Pisanio!

(I, 7, 140-148)

愛の証し（指輪と腕輪）を交し、別れを惜しんだ妻のことなど忘れて、夫は異郷ローマにおいて快楽に耽っていると云う。だがイモージェンは、卑猥な目的を持って近づこうとするイアチャーモの正体をすぐに見抜いて断罪する。「誠と名誉ある紳士を中傷し、貞節を知る貴婦人を誘惑しようとする悪魔のような男、そして紳士の名誉とは無縁の輩」であると。仮に、イアチャーモが真に心正しく、気高い精神の持ち主であるなら、その証しとなるような意図で先刻の話を、夫ポスチュマスの行状を語るはずである。その妻に向かって不貞の勧めなど口にするはずがない。イモージェンがイアチャーモの偽りを鋭く見透したその理由は、彼女に人を見る目が備わっているためであろう。言い替えれば、イモージェンは、人の善悪を判断する際の明確な判断基準を内に持っているのである。それに加えて彼女には、ポスチュマスその人の愛と人格に対する確固たる信頼があったに違いない。そうであるからこそ、イアチャーモの偽りを見抜き、誘惑を迷うことなく撃退するのである。当のポスチュマス自身の美德の実像がどこにあるかは別として、イモージェンの中の「愛」に対する態度には揺らぐことのない一貫性があり、それが力となって彼女を救ったと云うことができる。

しかしその一方で、こうした第三者による愛の妨害、中傷に動じることなく、己の信じるものを、確かな根拠のないまま簡単に疑ったり、放棄することなどあり得ぬイモージェンの姿は、皮肉にも、ポスチュマスに欠けるものを一層浮き彫りにすることにもなっている。

3. - (2) イモージェンの雄弁 / 脅かされる美德

イモージェンのポスチュマスに対する愛の障壁は、他にもあった。それは、父王シンペリーンの後妻となった現女王の息子クローテンである。クローテンは、度重なる拒絶にも関わらずイモージェンへの求愛を諦めず、その一方で、ポスチュマスを蔑み誹謗する男であった。高い地位より他に誇るものもなく、卑劣で傲慢なこの男を、イモージェンは激しく嫌悪し拒んだ。

Imo. I am much sorry, sir,
You put me to forget a lady's manners,
By being so verbal: and learn now, for all,

That I, which know my heart, do here pronounce,
By th'very truth of it, I care not for you,
And am so near the lack of charity
(To accuse myself) I hate you: which I had rather
You felt than mak'st me boast.

Clo. You sin against
Obedience, which you owe your father; for
The contract you pretend with that base wretch,
One bred of alms, and foster'd with cold dishes,
With scrapso'th'court, it is no contract, none;

(II, 3, 103-114)

引用文第二行目“a lady's manners”とは、然るべき養育を受けた王候貴族の婦人であるなら、わきまえているはずの作法、美德を指す言葉である。そしてここでは具体的には、あからさまに己の思うこと、考えることをそのままでは決して口にしない——そうした、慎ましやかな態度、貞淑さのことである。イモーゼンは今、その慎ましき振舞いを捨てようとは決心したのである。すなわち、“verbal”（引用第三行）になろうと決心するのである。すべての原因は、クローテンの執拗な求愛と傲慢さにある。彼は、女王の息子であるという、そのたった一つの理由で、自分にはポスチュマスを凌ぐ価値があると信じて疑わない。そして当然のことながら、イモーゼンも自分の申し出を拒むはずがないのである。婉曲な意志表示では、拒絶の真意が伝わらないと考えたイモーゼンは、聞き違いようのない表現を用いることで求愛拒否の「最後通告」を言い渡すことにしたのである。引用文第五行目の“th'very truth”とは、そうした決意を持って伝える「真実」即ち、イモーゼンのクローテンに対する本当の感情のことである。そして、聞き違いることのない明快な言葉とは、“I care not for you”であり、“I hate you”である。ただ、彼女は決して迷いなくこうした言葉を用いたのではない。イモーゼンはあくまで伝統的美徳を信じる人であって、守るべき“a lady's manners”を捨て、自分の美德を損なう振舞いを強いられることに苦痛と不快感——クローテンに対する怒り——を覚えていたはずである。その思いが引用の冒頭の言葉に込められている。

では、イモーゼンから「最後通告」を申し渡されたクローテンの返す言葉はどのようなものであろうか。彼には、「従順」の美德の教えに背く罪を責め、乞食同然の男ポスチュマスとの結婚をまやかしであると侮辱することより他に、イモーゼンの“th'very truth”の矢を迎え撃つ手はない。クローテンは、求愛と呼ぶことのできる言葉とは無縁の人である。偶然の賜物である地位——女王の息子、それ故に王の義子——に依りすがって他を誹謗し、他を蔑しめることが己の価値を高めることだと信じて疑わぬ愚かしさを、劇中幾度も露呈する。しかも、そのことに一度として気付くことはない。クローテンは、傲慢と自己中心と無知のままに、死に至るのである。¹⁹

ポスチュマスが孤児であり、シンベリーン王の寛大さと宮廷の施しに預かって命をつないだ経緯を殊更荷強調し、そのような卑しい育ちの者には王女の愛を受ける資格などない、と言い立てるクローテンにもはや忍耐もここまでと思い定めたか、イモーゼンは、先の「最後通告」も及ばぬ激しきで反撃に出る。

Imo. Profane fellow,

Wert thou the sun of Jupiter, and no more
But what thou art besides, thou wert too base
To be his groom: thou wert dignified enough,
Even to the point of envy, if 'twere made
Comparative for your virtues to be styled
The under-hangman of his kingdom; and hated
For being preferr'd so well.

(Ⅱ, 3, 123-129)

「汚らわしき男クローテンよ、たとえお前が神々の頂点に立つジュピター神の子として生まれついたとしても、ポスチュマスの馬丁に取り立ててもらふことさえ叶わぬほどの、生来の卑しさがお前には備わっている。」イモーゼンは、起こり得ぬ譬え話を用いてクローテンを嘲弄するのである。まず、引用文冒頭の侮蔑に満ちた呼姓“Profane fellow”に誰しも目を奪われる。文字通りには「救い難いほどに卑俗なる者」といったほどの意味だが、通常、相手を罵る時、あるいは悪態をつく時に用いる言葉である。イモーゼンのように貞節、貞淑の美德を完璧なまでに備え、女神にさえ喩えられる女性の口から発せられる言葉ではあるまい。クローテンに対する人称代名詞“thou”もまた、聞く者をはっとさせる語である。人称代名詞 thou は you とは違って、用いる相手と状況次第で、侮辱にも親愛にも聞こえてくる語であるが、ここでは言うまでもなく相手を“侮辱”する語として用いられている。最愛の夫ポスチュマスを正当な理由もなく、“base wretch”と蔑まれたイモーゼンは、内に激しい怒りを感じていた。その口惜しさが“thou”という語となって、又、先の“Profane fellow”という呼称となって現れたのである。そして、人としての一応の敬意示すことさえできぬほどの怒りは、攻撃の手を緩めることなく、クローテンめがけて更に次の矢を放つのである。

「仮にポスチュマスが一国の王であったとして、クローテンなど縛り首役人の下で走り使いの仕事にありつくのが関の山。いやそれでさえ、身分不相応の大出世だといって人の妬みを買うに違いない。」この時、イモーゼンの意図は、つい先刻までの意図——「真実」(th'very truth of [my heart], [] は筆者)を伝えること——とは違って、唯一つ、クローテンが夫に浴びせた誹謗の報復にある。あの“honourable”なるポスチュマスが“base slave”と呼ばれるならば、クローテンはその比ではない。彼こそは、筆舌に尽くし難い“baseness”の体現そのもののほずである。

「不従順」の罪を咎めることによってイモーゼンの翻意を促そうとするクローテンの目論見は、こうして裏切られることになる。そればかりか、女王の息子である自分が卑しい人間などと蔑まれたのである。彼は、女王の息子、次代のブリテン王の地位さえ約束されていると言ってよい自分こそは、“base”などという語からは最も速い、いや、まったく無縁の世界に住む人間だと信じていた。従って、イモーゼンの言葉を許し難い侮辱だと感じる。だが、想像力も言葉も乏しいクローテンの口から吐き出されるのは、貧しい陳腐な罵りの一言だけである。“The south-fog rot on him!” (Ⅱ, 3, 131-135)²⁰ クローテンのこの言葉を聞くや、イモーゼンは“south-fog” (の呪い) をポスチュマスと共に自分自身も浴びたかのように、怒りを噴出させる。

Imo. He never can meet more mischance than come
To be but nam'd of thee. His mean'st garment,

That ever hath but clipp'd his body, is dearer
In my respect, than all the habits abve there
Were they all made such men.

(II, 3, 131-135)

「毒気に当てられて死んでしまえ！」とクローテンが叫ぶと、イモーゼンは間髪を入れず切り返す。「ポスチュマスがこれまでに浴びた一番の不幸は、クローテンの使った軽蔑の呼び名だけ——base wretch; base slave——それに比べれば、南風に乗って吹き付ける毒気など恐れるに足りぬ。」クローテンの「死の呪い」を込めた罵りなど無力であった。イモーゼンは、再度比喩を用いて彼の卑少さを嘲笑う。「ポスチュマスの数ある衣服の中でも最も粗末で、最も汚れた衣にも値せぬ卑しい男。」それは、「真実」を告げると言って口にした“I care not for you”や“I hate you”よりも、遥かに激しく攻撃的な言葉であった。そしてそれ故に、女神のイメージや伝統的美徳のイメージから彼女を遠ざけかねない言葉である。また、“nothing but a puppet”とは、尚更縁遠いイモーゼンであることも示す言葉でもある。イモーゼンは必要とあれば、品位を失ってしまう危険を顧みることなく、激しい言葉によって相手を攻撃し、報復することさえできる女性であった。

4. イモーゼンの伝統的美徳

前章では、イモーゼン自身の言動に現れる強い自我を中心に分析し、解説を試みた。特に、劇の冒頭から前半にかけて顕著に見られる傾向である。それは、劇中、他者の目に映るイモーゼン像とは相反するような女性像である。この章では、その、他者の目に映ったイモーゼンを取り上げることにしたい。

美徳の鑑としてのイモーゼンは、彼女に愛され、夫となっポスチュマスによってまず紹介されている。

4. ー(1) イモーゼン： 美徳の鑑

第一幕五場、追放の身になってローマに渡ったポスチュマスは、知人フィラーリオの屋敷に身を寄せる。そこで彼は或るフランス人に再会する。その男には旅の途上オルレアンで既に一度会っていた。この男の話から、ポスチュマスが妻イモーゼンのことを大いに自慢していたことが分かる。

French. It was much like an arguement that fell out
last night, where each of us fell in praise
of our country mistresses; this gentleman
at that time vouching (and upon warrant of
bloody affirmation) his to be more fair,
virtuous, wise, chaste, constant, qualified
and less attemptable than any the rarest of
our ladies in France.

(I, 5, 53-59)

ポスチュマスにとって、たとえ、フランスの女性達に会ったことはなくとも、イモーゼンの方がすべてにおいて彼女達よりも優れているに決まっていた。「美貌」において、「徳」において、「知」において、「貞節」において、「愛の誠」において、「資質、素養」において、「誘惑に抗う力」において、イモーゼンに秀でる女は誰一人いるはずはないのである。「あなたの国随一の女性が相手でも、イモーゼンのすばらしさには適いませんよ。」それは或る意味で、浅薄な身内花話、自慢話である。ただここでは、ポスチュマスの浅慮は問題にしないで、イモーゼンに与えられている賞賛が、女性に望まれるありとあらゆる美德であることに注目したい。そのすべてを備える女性は理想ではあっても、現実には存在しないような、いわば夢物語に登場する女性であった。そして、その非現実性をイアチャーモが揶揄し、ポスチュマスの顕示欲を挑発してその比類のない「貞節」が完璧か否かを問う「賭け」へと発展したのであった。

イモーゼンの美が非現実の夢か否かは別として、彼女の美（外観の美を含むすべての美德）が第三者の言葉を通して語られる時は、この、劇冒頭で示される理想の美、理想の女性像が基底になっていることに注目しなくてはならない。中世以来の女性に関する価値観をそっくり鑑のように映す女性像、そのような意味で伝統的美徳をすべて備えた女性。それがイモーゼンの中に描かれる女性像であることを、ポスチュマスの賛美の言葉が伝えているのである。先に見たイモーゼン自身の言動とは必ずしも一致しない要素が幾つかあるものの、第三者の語るイモーゼンは、まず、第一幕五場のこの引用に紹介されたような「美德の鑑」として繰り返し言及されることになる。

4. ー(2) イモーゼンの神性

劇中、「美德の鑑」として讃えられるイモーゼンはまた、人間ではなく、神もしくは神に準ずる存在としても讃えられている。人間に起こりうる最高の美を、しかも、ありとあらゆる美を備える人であるが故に、「女神の如し」と、その美を崇められるのである。イモーゼンを直接知る人々、偶然に彼女を目撃した人々は、その美を描写しようとすれば、神に喩えるより他に術を知らぬのであろう。

4. ー(2) ー a 神の賜物

第一幕五場、ポスチュマスはイアチャーモを相手に、イモーゼンの価値は世俗の価値では測れぬもの、即ち、貨幣と交換して手に入れることのできる商品、たとえばダイヤモンドの指輪などとは本質的に異なるものであると説く。凡庸の人間には知り得ぬ尊い神の賜物なのである。この時、ポスチュマスの用いる表現——the gift of gods——は、まさしくイモーゼンの神性を表す言葉に他ならない。

4. ー(2) ー b 不死鳥

自分の妻を絶賛して憚らぬポスチュマスの言葉を疑い、イモーゼンの「貞節」の守りの堅さを確かめようとブリテンにやって来たイアチャーモは、初めて目にするその外観の美しさに打たれて、思わず彼女を「不死鳥」と呼ぶ。「万一、この美貌と瓜ふたつの美德を内に秘めているとすれば、まさにこの女、世に二つとお目にはかかれぬ不死鳥の鳥！」(I, 7, 17) イアチャーモが嘆息と共に洩らしたこの言葉、“Arabian bird”は、イモーゼンの美に或る種の神性を感じ

取った者の言葉であろう。絶えずみずみずしい美と生命を蘇らせる不死鳥——彼は永遠の美を見たのである。それは、人間には叶わぬ超自然の美であった。

4. ー(2)ー c 妻に非ず、女神の如し

第三幕二場、イアチーモの報告からイモーゼンの不貞を確信したポスチュマスはローマからブリテン宛てに二通の手紙を送る。そのうちの一通は召使ピサーニオに宛てたものである。その中には、イモーゼンの不貞という驚くべき事実と、報復としての殺害命令がしたためてあった。“Thy mistress hath played the strumpet in my bed” (Ⅲ, 4, 21-22) ピサーニオには、主人の言葉は信じ難いものであった。

Pis. How! of adultery? Wherefore write you not
What monster's her acuser? Leonatus!
O master, what a strange infection
Is fall'n into thy ear! What false Italian
(As poisonous tongu'd as handed) hath prevail'd
On thy too ready hearing? Disloyal? No.
She's punish'd for her truth; and undergoes,
More goddess-like, than wife-like, such assaults
As would take in some virtue. O my master,
Thy mind to her is now as low as were
Thy fortunes.

(Ⅲ, 2, 1-11)

ピサーニオは、中世を誓って仕える主人であるポスチュマスの誠実な人柄を疑ってはいない。しかし、それに劣らぬほど、王妃であり主人の奥方でもあるイモーゼンの貞節を疑うことはできなかった。「妻というよりは女神と呼ぶ方が似つかわしいあの御方」——そのあの方が、貞節を疑われることなどあってよいはずがない。仮に「不貞の噂」があるとすれば、それは誰か良からぬ者の企み、異郷イタリアの悪党が仕組んだ罠に違いない。ピサーニオには、正直で信じやすいポスチュマスが騙されているとしか思えなかった。それほどに、イモーゼンの貞節は一点の曇りもない、完璧な美徳であった。まさに、“more goddess-like than wife-like”の言葉通り、人間を超えた神のような「美徳の人」であった。身近にあって、その人柄をつぶさに観察する機会にも恵まれたと思われる、ピサーニオの讃辞には説得力がある。彼は、イモーゼンの美徳を信じるからこそ、絶対服従の教えを（一時的に忘れて）敢えて背き、彼女の命を救おうとするのである。彼のイモーゼン賛美の注目点は、はっきりと、「女神」という言葉を用いている点である。

4. ー(3)ー イモーゼン： 天使の如き美

第三幕七場、イモーゼンはピサーニオの勧めに従って、一人旅の危険を避けるための男装に身を包んで、ミルフォード・ヘイブズに向かう。やがて、旅の緊張の疲れからか、とある洞窟を見つけた彼女は、そこで暫く休息を取ろうと体を休めるうち、眠り込んでしまう。

Gui. What's the matter, sir?

Bel. By Jupite, an angel! or if not,
An earthly paragon! Behold devineness
No elder than a boy!

(Ⅲ, 7, 14-17)

その洞窟は、ベラリウスの住家であった。二十余年前、彼は中傷によってシンペリーン王から身に覚えのない謀反の疑いを受け、怒りのあまり幼い王子二人を誘拐し、己の子として育ててきたのであった。やがて人里離れた森での生活は、今こうして珍客の到来によって変化を余儀なくされるのである。息子二人と共に狩から帰ってきたベラリウスは、「天使」が洞窟の中に眠っていると錯覚する。あまりに清らで、天上界から降り立った神の使いかと思わせた——超自然の美が空より舞い降りたのである。

イモーゼンはこの時、既に触れたように男性に——少年の姿ではあるが——変装していた。だが、男性の衣をまともにもなお、彼女の身に備わる神の世界を思わせるたたずまいは隠しおおすことはできず、衣の端から天上の光が漏れ輝いていたのである。

こうして、劇中複数の人物から讃えられる神性はイモーゼンと切り離すことのできぬ資質であることが分かる。そして、この devine beauty のイメージが、19 世紀批評家達の共有したイモーゼン礼讃を生む要因となったことは間違いないものと思われる。

5. イモーゼンの弱点

さて前章では、劇の冒頭からイモーゼンがどのように描かれているか、その人物描写を追ってきたわけであるが、或る意味で対照的な二つの側面が浮かび上がってきた。一つは、イモーゼン自身の言動から窺うことのできる、強い自我を持つ女性であり、今一つは、劇中、他の登場人物の目に映る理想の女性像——女性に望まれる美徳をすべて備えた、女神に喩えられる女性の姿である。そして、自分の思うこと、感じることをそのままに表現し主張するイモーゼンの言葉は、見方によれば、他者から讃えられる理想の姿や品位を損なう恐れを抱かせるほどである。

しかしながら、イモーゼンを表す特性は、この、一見相反する二つの横顔がすべてではない。彼女は、この両者のいずれとも調和することのない、別の要素も持ち合わせているのである。そしてその一つは、「神々しいばかりの純潔」と嘆息したベラリウスの言葉を覆す印象を与えるものである。

5. ー(1) イモーゼンの sexuality: 意図せぬ誘惑の美

第二幕二場、昼間王妃イモーゼンへの御目通りを許され、危うい場面もありはしたものの事なきを得て宮殿の中に宿をあてがわれたイアチーモは、その同じ日の夜更け、すべてが眠りと闇に閉ざされた頃、イモーゼンの寝室に現れる。と言っても、彼は一計を案じて既に大型の旅行鞆に身を潜めて部屋の中に侵入していたのである。

Iach. Our Tarquin thus
Did softly press the rushes, ere he waken'd
The chastity he wounded. Cytherea,

How bravely thou becom'st thy bed! fresh lily!
And whiter than the sheets! That I might touch!
But kiss, one kiss! Rubies unparagone'd
How clearly they do't: 'tis her breathing that
Perfumes the chamber thus: the flame o'th'taper
Bows toward her, and would under-peep her lids,
To see th'enclosed lights, now canopied
Under these windows, white and azure lac'd
With blue of heaven's own tinct.

(II, 2, 12-23)

シェイクスピアの詩の一篇、『ルークリースの凌辱』を思い起こさせるタークインの名。この時、イアチーモは現実にはタークインのように人妻の凌辱に及ぶことはない。だがこの言及は、真っ白いシーツのかかった寝台に身を横たえ、深い眠りの中にあるイモージェンの姿を目にした時、彼の頭を過ったのは情欲の誘惑であったことを物語っている。また、愛の女神シセーリア（ヴィーナス）の名をもってイモージェンを呼ぶのは、おそらく、その透き通るような肌に目を奪われ、思わず口にした名であろう。寝具を包む純白のシーツの白さと、イモージェンの柔肌の白さとが溶け合い、はや「純潔の白」一色となっていた。その肌の白さを一層引き立たせるように、唇には紅色の蕾、宝石ルビーの蕾が宿る——閉じられた二枚の小さなルビーの花弁が重なり合い、接吻を交わしている。「美德の鑑」のような女性の存在をあくまで疑い、ポスチュマスとイモージェンの二人を欺いてダイヤモンドの指輪を手に入れようとするイアチーモ。その世俗性とは結び付きようなない想像力豊かな美の描写である。イアチーモの言葉は、読む者、聞く者の想像力を促し、一枚の絵を描かせていく。

だが、その美はピサーニオによって“more goddess-like than wife-like”と讃えられたものとは違って、強く sexuality (sexual desire) を促す力を秘めたものである。確かに、イモージェンの美は“fresh lily”に喩えられるような純潔の美であるに違いない。そのこと自体は疑い得ない事実として、同時に、その純潔の象徴となる肌の「白」と唇の「紅」の色の対照や、二つの紅色（二枚の紅色の唇）の接吻——そうしたものから醸し出される、或る種官能のイメージの浮かんでくることも否定できないのである。芳香のように香しい吐息も同様である。人口の香りを嗅ぐよりもイモーゲン自身の体内から漏れ漂う吐息であればこそ、それを吸い込む者の胸に情欲への誘惑を目覚めさせるのである。閉じられた瞼でさえも、昼間目撃したイモージェンの瞳の青さとそれを取り囲む白（白眼）の残像を甦らせる。イアチーモの感覚が肉体への誘惑を覚えぬはずはない。

但し、既に触れたようにイアチーモは実際には、イモージェンの体には指一本触れることはない。又、イモージェンの場合には、『オセロウ』の女性主人公デズデモーナがイアーゴウの中傷によって受けたような、修復のつかぬ痛手を負うことはない。彼女の純潔のイメージや貞節の美德は、劇全編を通して見れば大きく損なわれることはないのである。その理由の一つは、上記に取り上げたようにイモージェンを中傷し、傷つけようとする人物からも、感嘆と称賛を報われる美として描かれていることであろう。

ただ忘れてならないのは、そして興味深いことでもあるが、イモージェンの美は「純潔の美」（貞節の美）でありながら、彼女自身の意図せぬ形で「官能の美」（情欲を促す美）に変じている点である。そしてそのことが、身に覚えのない不貞の汚名を呼び寄せる要因ともなっている

5.一(2) イモーゼンの選択： 従順の美德

Imo. Come fellow, be thou honest.
Do thou thy master's bidding. When thou see'st him
A little witness my obedience. Look,
I draw the sword myself, take it, and hit,
The innocent mansion of my love, my heart:
Fear not, 'tis empty of all things, but grief:
Thy master is not there, who was indeed
The riches of it. Do his bidding, strike.
Thou mayst be valiant in a better cause;
But now thou seem'st a coward.

ところがその一方でイモージェンは、身に覚えのない不貞の罪を問われるばかりか、罰として「死」の裁定を下されることを理不尽な仕打ちと感じてもある。その、理不尽な仕打ちを承

服しかねる思いは、引用文第四行目の“hit mansion of my love, my heart”という挑戦的な言葉となって表れている。「罪なき罪を問われるこの汚れない心、(ポスチュマスへの)愛より他に宿るもののないこの私の心臓を、刀もて討てよ。」とは、悲しみと口惜しさの入り混じった声である。引用文第五行目もやはりそうである。“[my heart] is empty of all things but grief” ([]は筆者)今は、心の中に悲しみよりも他に何も残るものはない、というその言葉は「愛」の喪失を意味している。失われたすべてのもの“all things”とは、ポスチュマスのイモーゼンに対する愛ばかりではなく、身に覚えのない罪を妻に問い、死までも報おうとする夫に失望し、怒りを覚えずにはおれぬイモーゼン自身の、ポスチュマスに対する失われた愛をも指すものと思われる。更には、引用文の末尾で彼女はピサーニオに向かっても、暗に抗議の意思表示と思われる言葉を口にするのである。「同じ忠義を尽くすのであれば、もっと雄々しく誇らしく果たすことのできる務めもあったろうに」それは一見、不本意な忠誠の証しを強いられて苦しむピサーニオの立場に思いやりを示しているかに聞こえるが、その実、皮肉のこもった揶揄でもある——このような理不尽の手先となって、「忠誠」と称して無垢の血を流す過ちに手を染めねばならぬとは、哀れなるかな、と批判し蔑んでいるのかもしれないのである。

しかし、仮にそうであっても、イモーゼンの選択が「死」に甘んじることに変わりはない。彼女が最優先させようとするのは、たとえ抗議や皮肉を婉曲に込めた表現を取ろうとも、夫ポスチュマスの望む通りに従うこと、即ち、“obedience”という語によって示される「美徳の遵守」にあることは間違いないのである。それは結果として、もう一つの自己を捨てることを意味する。劇の冒頭から、あれほど一貫して己の信ずるところを主張し、自我を通してきたあのイモーゼンを、ある意味で捨ててしまうことを意味した。そしてこの姿を目にする時、傍観者の胸には説明のつかぬ落胆の思いが残らずにはすむまい。何故イモーゼンは、夫の理不尽に対しては「否」と言わぬのか。父シンベリーンや、望まぬ求婚者クローテンの自己中心と傲慢には、声高に抗議の声をあげながら、夫ポスチュマスの前には頭べを垂れ、不条理の咎を受容しようとするのは何故か。

5.-(3) イモーゼン： 盲目の愛

第三幕四場、ピサーニオは一人ミルフォード・ハイブンに向かうイモーゼンに男装を勧め、別れ際にある薬のはいった小箱を手渡す。それは、第一幕六場、妙薬として“I do not know/What is more cordial” (I, 6, 63-64) と言う女王からもらい受けたものであった。ところが、その妙薬とは、ポスチュマスの召使ピサーニオとイモーゼンの殺害を目論む女王が、王医のコーネリアスに命じて調合させた劇薬であった。もっとも、実際には、コーネリアスの賢明な判断で毒性が弱められ、仮に口にしたとしても死には至らず、ひととき深い眠りに陥った後、目覚めるはずであった。

イモーゼンは旅の途上、森の洞窟に住むベラリウス父子の元に一時身を寄せることになる。偶然目にしたその洞窟で体を休めたのが縁であった。翌日、皆が狩に出かけてひとり残ったイモーゼン(男装した彼女の変名はフィデーレ)は、ピサーニオにもらった例の妙薬を口にする。一刻も早く疲れを癒して旅を急ぎたかったのである。しかし、彼女は予期せぬ長い、深い眠りに陥る。やがて狩から帰ってきた男達は、眠るフィデーレが死んでしまったものと思い込み、挽歌を掲げて弔う。そして、深い眠りから覚めた当のフィデーレは、傍らに横たわる頭のない男の死体に気付くのである。

Imo. A headless man? The garments of Posthumus?
I know the shape of's leg: this is his hand:
His foot Mercurial: his Martial thigh:
The brawns of Hercules: but his Jovial face——
Murder in heaven! How—? 'Tis gone. Pisanio,
All curses madd'd Hecuba gave the Greeks,
And mine to boot, be darted on thee! Thou,
Considered with that irregularous devil! Cloten
Hast here cut off my lord. To wwrite, and read
Be henceforth trecherous! Damn'd Pisanio
Hath with his forget letters (damn'd Pisanio)
From this most bravest vessel of the world
Struck the main-top! O Posthumus, alas,
Where is thy head? where's that? Ay me! where's
that?

(IV, 2, 308–321)

その「首（顔）のない死体」とは、最愛の人ポスチュマスであった。但し、それはイモージェンの思い込みである。確かなことは唯一つ——傍らの男はポスチュマスの衣服を身にまとっていた。そしてそのことが、皮肉な思い込みを生むのである。「（これはあの方の脚）私はあの方の脚の形はよく知っているの。これはあの方の手。」と、まず、首のない肉体が夫のものであることを確かめるイモージェン。だが、その「（よく知る）はずの脚も、手も、実はポスチュマスのものではなく、クローテンの——あの最も軽蔑する男のものであった。無論、彼女は知る由もない。「（これは）マーキュリーのようなあの方の足、マーズのような太腿、そして、このヘラクレスのものかと見紛う筋肉」次々と古代ローマの神々に喩えられる四肢は、ポスチュマスの肉体が人間の理想美を備えた見事な肉体であることを物語っている。しかし、またしてもその神々に喩えられる理想の四肢は、「もしもポスチュマスが王ならば、せいぜい縛り首役人の走り使いに過ぎぬ」と蔑まれた男、クローテンのものであった。にもかかわらず、イモージェンはそれが愛する人の肉体と信じて疑う様子はない。彼女が恐怖し、不安がるのは唯一つ。死体の首から上がどこにも見当たらないことである。あの、絶対神ジュピターを思わせる夫の顔はどこであろうか？但し、「顔」の行方が分からぬことに不安を覚えるものの、そうであるからといって、傍らの男の体が夫ポスチュマスのものであることを、一瞬たりとも疑うことはなかった。

揺らぐことのないイモージェンの「愛」に対する自信は、夫ポスチュマスの衣を見た瞬間、まったく相入れぬはずの二つの肉体、二つの精神を取り違えてしまったのである。すくなくとも、イモージェン自身にとってその二つが同一に見えることなど、あり得ようはずはなかった。それにもかかわらず取り違えるのである。そして耐え難いことに、この、イモージェンの目を眩ませた「衣」こそは、クローテンが必ずや恨みを晴らしてやると、復讐の誓いを立てた衣であった。（第二幕三場、クローテンは「ポスチュマスの最も粗末な衣にも劣る、取るに足りぬ男」と、イモージェンからなじられる。）そして今、その衣、“[Posthumus] mean'st garment”（〔 〕は筆者）によってイモージェン自身が欺むかれたのである。言ってみれば、彼女の目は「衣」の力によって盲目となってしまうのである。「衣」には、「夏の夜の夢」の中の恋の媚薬のような

超自然の力はないはずであるが、結果としては恋の媚薬と同じように、恋する相手を取り違えさせてしまう。作者シェイクスピアはひょっとしたら、恋というもの、愛というものの不確かさを再度、婉曲にはあるが、懷疑すべしと、揶揄し警告しているのかもしれない。

それにしても、首を切り落され死者となったクローテンが目の前にいるとも知らず、彼とピサーニオの二人をポスチュマス殺害者として弾劾するイモーゼンの姿は、哀れでもあるが、見方によっては、滑稽にも映る場面である。「衣」を見てすべてを知ったと錯覚するイモーゼンは、浅慮の誹りを免れることはできまい。そして、愛する人の誇るべき四肢を、唾気すべき人間のそれと見間違えるイモーゼンの目は、節穴と言われても抗弁することさえ憚られる。それは、悲しく滑稽な節穴である。

5.-(4) イモーゼンの自己中心性

イモーゼンの弱点として最後に挙げるのは、自己中心性を窺わせる言動である。それは、第五幕五場において顕著となってくる側面であり、自分の窮地を救ってくれた人々に対する恩知らずな態度として現れる。その恩を感じるべき人々とは、(男装してひとり旅をする)イモーゼンを小姓として召し抱えてくれたローマの全権大使カイウス・ルーシアスと召使ピサーニオである。

第五幕五場、ブリテン軍に敗れたローマ軍の兵士達は、その将ルーシアスを頭にブリテンの捕虜となり、ブリテンの王シンペリーンの前に引き出される。この時、敗軍の将ルーシアスは唯一の助命嘆願として、小姓フィデーレの命は赦してもらえぬかと願い出る。

Luc. This one thing only
I will entreat, my boy (A Briton born)
Let him be ransom'd: never master had
A page so kind, so duteous, diligent,
So tender over his occasions, true,
So feat, so nurse-like: let his virtue join
With my request, which I'll make bold your highness
Cannot deny: he hath done no Briton harm,
Through he have serv'd a Roman. Saave him, sir,
And spare no blood beside.

(V, 5, 83-92)

ルーシアスはまず、小姓フィデーレがブリテン人であることを紹介し、暗に、彼が勝者ブリテンに敵対する者ではないことを訴えようとする。そして、引用文第三行目から六行目にかけては、フィデーレが小姓として如何に優れた資質を持っているか、称賛の言葉が並んでいる。「忠誠心に厚く、誠実で、任務を怠けることなど決してなく、性格としてのやさしさも備えた申し分のない人物。これほどの小姓を召し抱える主人はまずありますまい。」最大限の讃辞でフィデーレを褒めたルーシアスは、最後にこうつけ加える。縁あって、ローマの主人に仕えはしたが、彼自身はブリトン人の誰一人として危害をくわえてはおらぬ、従って、何ら（裁かれるべき）罪はないのである。

ルーシアスの願い出るまでもなく、既にフィデーレの容貌に何故か注意を引かれ、憎からず

場面は同じ第五幕五場である。シンペリーン王の求めに応じて、「ダイヤモンドの指輪」の由来を包み隠さず語るイアチーモの話から、イモージェンの死を確信したポスチュマスは狂ったように嘆きの叫びを挙げる。“O Imogen, Imogen, Imogen!” (V, 5, 226-227) それを見て、小姓の姿をした妻に気付かぬ夫に駆け寄り、イモージェン（小姓フォデーレに変装したままである）は“Peace, my lord, hear, hear——”と、名乗り出ようとする。が、平常心を失なったポスチュマスに聞く耳などなく、荒々しく小姓を打ちすえ、払い除けてしまう。その時、昏倒したイモージェンに真っ先に駆け寄るのはピサーニオである。

(V, 5, 229–232)

— 93 —

(chastity)であり、引用にある honour の形容詞形, “honour’d” は chaste と同一の言葉と考えてよい。ピサーニオは今、「私の奥方様は、この世にある女性の中で最も貞節で汚れなき御婦人。私の誇りと仰ぐ美德の鑑のような御方」と、誰憚ることなく叫びたい衝動に駆られたのである。そして、その衝動の叫びはまた、比類なき人イモーゼンの貞節を疑い、死の宣告まで与えたポスチュマスに対する抗議も込めた声であった。劇中、ピサーニオほどにイモーゼンの潔癖を信じ、自己を滅却して奉仕する人物は他には一人としてない。だが、当のイモーゼンに、その違いを見極める判断力と、愛情ある忠誠心を感じ入る心があるかと問えば、それははなはだ疑わしい。

Imo. O, get thee from my sight,
Thou gav'st me poison: dangerous fellow, hence!
Breathe not where princes are.

(V, 5, 236-238)

ポスチュマスの生存をその目で確認していながらなお、イモーゼンのピサーニオに対する疑いと憎しみに変りはなかった。毒薬を妙薬と偽って彼女に飲ませたと信じているのである。もっとも、そのこと自体は無理のないことであるかもしれない。しかし、この後第三者の証言から、クローテンの企みと死の直接の原因について、また、亡き女王によるイモーゼンとピサーニオの殺害計画について、新たな事実が次々と判明しても、彼女は自分の思い違いを認めることはないのである。ましてや、その非をピサーニオに詫びることは一切ない。引用文にあるように、「顔も見たくない悪党である」とか、「宮廷に二度と現れるな」といった意味の罵りを込めた解雇通告も、撤回されることはない。ピサーニオには過失も罪もなかった事実も含めて、すべての事実が判明した後、イモーゼンの為したことと言えば、再会したポスチュマスと堅く抱擁をを交わし、父シンベリーンの望みに答えて（謝罪の言葉を添えて）父娘の和解を果たすことのみである。ピサーニオの存在はまったく視界の外にあると言ってよい。だが、彼の存在と忠誠心なくして、イモーゼンの命の保証はなかったはずである。従って、夫や父との再会、和解もあり得なかったに違いない。そのような感謝してもしきれぬ相手に対して、あまりにも無情の態度を見せるイモーゼンであり、ここにも自己中心の横顔が見える。

こうした、ピサーニオの労と誠意に対する思いやりの欠如は、主人に対する奉仕は従者として当然の務めであり、特に、主人の方から謝意を表す必要はないと考えるとしても、それは地位ある者の驕りの現れであると言われても否定はできまい。この場面でのイモーゼンのピサーニオに対する無言（謝意も謝罪も皆無という意味での疑問）は、権力ある者の傲慢をそのまま映しており、仮にそうであるなら、イモーゼンに与えられる美德の誉れは実に薄っぺらなまやかさに過ぎなくなってしまう。

6. シンベリーンの傲慢

イモーゼンの見せる自己中心性は、実は、父シンベリーンにも共通する弱点であり、為政者としては、重大な欠陥とさえいってよい重大な問題である。この弱点が見て取れるのはカイウス・ルーシアスの小姓としてローマ群に属した罪を不問にして、フィデーレ（変装、変名したイモーゼン）を赦免し、新たにシンベリーン自身の小姓に取り立てる時の態度である。それは、第五幕五場、ブリテン軍に捕らわれた敗軍の将、カイウス・ルーシアスが、自分の死は覚悟したうえで、小姓フィデーレの助命嘆願を真摯に乞う態度とは実に対照的である。その時

のルーシアスの言葉と態度には、いかにもローマ人の誇りと高潔さが窺われ、聞くもの、見る者の心を動かさずにはおかぬ力がある。一方、シンベリーンという言葉からは彼自身の自己中心性と自己顕示欲ばかりが印象づけられるのである。

Cym. I have surely seen him:
His favour is familiar to me. Boy,
Thou hast look'dst thyself into my grace,
And art mine own. I know not why, wherefore,
To say, live boy: ne'er thank thy master, live;
And ask of Cymbeline what boon thou wilt,
Fitting my bounty, and thy state, I'll give it:
(V, 5, 92-98)

シンベリーンには見覚えのある小姓の顔であった。そして、理由は定かではないが、気に入ってしまうのである。彼は、フィデーレに対する所有権を確実なものにする目的から、旧主人ルーシアスの恩を忘れるよう促す。「夢々（命を救われたことを）かつての主人、ルーシアスに感謝するでないぞ」その言葉には新たな主人であるシンベリーンへの絶対忠誠の誓いを強要する響きがある。また、「お前の欲しいものを申し出てみよ。願いは何でも叶えてやる。」と続けるその言葉は、服従と引替えに保証する報奨と見ることもできる。フィデーレの死の足かせを解いてやる代わりに、恩義という一層重い鎖に縛り付けようというわけである。支配者としては、このくらいの狡猾さが必要であるかもしれない。

しかしながら、“ne'er thank thy master”というその言葉は、あまりに狡猾で卑しい心根ではないであろうか。敗れたりとはいえ討伐軍の将として、誇りあるローマ人として、潔く死を受け入れ、罪なく力なき者の命は何としても救おうと言葉を尽くすルーシアスの「高潔」の精神とは天と地の隔たりがある。もしも、シンベリーンが自己に対して真に自信ある王であるならば、敵軍ながら、この見上げるべき高潔の士を讃え、「主人の恩を忘るべからず。その恩に報いるためにも、このシンベリーンの前で新たな務めに励めよ。」と、小姓に申し渡すべきではないか。シンベリーンの望む通り、助命嘆願までもして救おうとしてくれた主人の高潔の恩をいとも簡単に忘れ去るような家臣であれば、新しい主人に対する忘恩も何の苦もなくやってのける日が早晚訪れるかもしれぬではないか。シンベリーンとは、実に浅慮で小心の王である。

更に、小姓の容貌に心引かれて芽生えた親愛の情は、「衣」に惑わされたイモージェンの盲目とは違った意味で、シンベリーンを盲目にする。先刻見た通り、彼はルーシアスの命の行方など視界の外に置き忘れ、ただイアチャーモの指に光るダイヤモンドに目を吸い寄せられてしまう小姓を見て、不信——小姓の忠誠心に対する懷疑——を抱くどころか、いよいよ執着を強めて“I love thee more and more: think more and more/ What's best to ask” (V, 5, 107-110) と、小姓の願いをすべて叶えてやりたい衝動にかられるありさまである。もはやこの時、シンベリーンは「お前の分をわきまえた申し出なら、そしてこの王の意に適うなら（思い通りにしてやろう）」と言った条件を自ら無視してしまうのである。この姿から我々が思い起こすのは、後妻として迎えた女王の言いなりである、とのシンベリーン批判が貴族の一部にあったことである。(I, 1, 55-64, Sekond Lord の言葉)「憎からず」と思えば、愛は盲目となり、最大限の譲歩を生むのである。シンベリーンは、自ら望んで迎えた第二の後の死後、王医コーネリアスやピサーニオの証言から初めて彼女の愛が偽りであることを知る。更に第二の後は、我が子クローテンを拒む王妃イモージェンを、己の野心を阻む障害として憎み、殺害を企てたことも知ることに

なるのである。次々と暴露されていく悪事を知って初めて、女王の本性を知るシンベリーンである。“O most deliberate fiend!” (V, 5, 47)

だが、シンベリーンは己の非を自覚し、誤った考えが結果的に他を、中でも、イモーゼンとポスチュマスを苦しめたことを悔いるわけでもなく、許しを乞うわけでもない。彼は、すべてを不問にしたまま娘イモーゼンの抱擁を求め、更に共に再会の喜びを共有して満足であった。

そして、肉親との再会の喜び——二十余年前に失踪した二人の王子との再会の喜びも重なる——は、ローマとの融和へと発展していく。それは政治的決断としては重大な変更であるが、何故その決断が為されたのかその理由を見れば、またしても、王があくまで自己中心の男であることが分かる。

Cym.

Well,

My peace we will begin: and Caius Lucius,
Although the victor, we submit to Caesar,
And to the Roman empire; promising
To pay our wonted tribute, from the which
We were dissuaded by our wicked queen,
Whom heavens in justice both on her, and hers
Have laid most heavy hand.

(V, 5, 459-466)

ブリテンはローマへの貢物を再開すると言う。これまで貢物を拒んできたのは、亡き女王の説得に屈したからであり、その悪しき助言者は今、王子クローテンと共に天罰を受けこの世にはない。ローマとブリテンの和平と友好関係を阻む者のいなくなった今こそ、貢物を再会させる絶好の時であると言わんばかりの言葉である。

ローマへの反逆は国政の決断として大きな誤りであったことを間接的に認めつつも、その責任は悪しき女王にあると、全責任を彼女に帰そうとする意図は明白である。シンベリーンには、それがたとえ他からの進言を入れたものであれ、国政に関わる最終決定の責は王たる者にあるという自覚も誇りもないのである。彼は、国家の選択のもたらす良き結果のみ王に帰し、悪し結果は、他に負わせて自らは素知らぬ顔をして難を逃れようとする為政者である。シンベリーンには、ローマの予言者 Soothsayer の言葉にあるような（あるいは、ジュピター神の残した “tablet” の予言するような）気高く空に向かって聳え、誇りの何たるかを知る雄々しい大木にはなり得ぬ人である。気品ある大木 “the lofty cedar; a stately cedar” とは無縁の人である。

しかしながら、この、ローマの高潔の精神とは無縁の人、シンベリーンの名を冠した物語『シンベリーン』の中にも、高潔の士は存在する。先に挙げた召使ピサーニオがそうであり、そして、ローマ人のカイウス・ルーシアスがそうである。そしてもうひとり、ブリテン王の血を引く若者ポリドールことギデリウスにもその資質が窺える。ウエールズの山中においてクローテンと対決するギデリウスの堂々たる態度こそローマの価値、「勇気、名誉、高潔」といった美德に匹敵する誇り高き精神を体現するものと言うことができよう。父シンベリーンの中には痕跡を留めぬブリトン人の誇りが長子に受け継がれたのであろうか。

結 び

シェイクスピアのロマンス劇第二作目、『シンベリーン』に登場する主要人物達は、作品の主題と人物の評価や解釈に関して、重大な視点を与えたとして高く評価される G. Wilson Knight が示唆しているようには、必ずしも理想的人格であるとは言えないことが分ってきた。それは、序において触れ、本文中の分析を通して見てきたことであるが、劇中において、他の人物達の言葉が伝える主要人物達の姿や人格と、彼等自身の語る言葉や行動とが、必ずしも一致しないからである。しかしながら、このことは結果的には、一つの利点を生んでいるように思われる。劇を観る者、或いは読む者の目には——理想とはほど遠い姿を彼等の中に見出して——むしろ、人間としての現実感をより強く感じさせる存在として、映ってくるのではないであろうか。

劇作家の描く人間達が舞台上に登場する時、あまりにも理想的過ぎて絵空事のような印象を与えるならば、そこに人々は、命の通う人間を見ないであろう。むしろ、時として愚かしく、時として醜くくさえある一面を露わにする時、我々は逆にその姿に、現実生きて在る人間を見る思いがするに違いない。『シンベリーン』に関して言えば、主要人物達の中でも、19 世紀には批評家達から女神崇拝に近い賞賛を浴びたイモーゼンの人物像に関して、女性としての理想的美徳とは違った側面を窺い知ることができたのは、そういった意味で非常に興味深い。彼女は決して賞賛一色の女性像でもなく、伝統的美徳の体現のみを託された人物でもない。

しかしながら、イモーゼンが肯定的側面と否定的側面の二つの面を合わせ持つ女性として浮び上ってきたことは、単に『シンベリーン』という作品一作に関する見方に対して、ある変化を求めるだけではない。それは、シェイクスピアの描く女性像の系譜を考えていく際にも、新たな興味と関心を促すものを含んでいるのである。『シンベリーン』を含む四作のロマンス劇には、各々、一人の女性主要人物が登場するが、イモーゼンを含めて三人は未婚の乙女である。そして残る一人は、人妻であり、二人の子を持つ母でもある。²¹ この四者の共通点と相違点を比較しつつ、彼女等の中に描かれた女性像を考えていく時、多面的な女性としてのイモーゼン像は、自ずと、他の三人に関する見方を左右せずにはおくまい。おそらくは、彼女等も又、一面的な見方では測り知ることのできぬものを秘めているに相違ない。

注

1. Samuel Johnson, "Notes on Shakespeare's Plays: 'Cymbeline'," in his *The Yale Editions of the Works of Samuel Johnson: Johnson on Shakespeare*, Vol. VIII, edited by Arthur Sherbo, Yale University Press, 1968.
2. Alexander Pope, a note on "Cymbeline" in *The Works of Shakespeare*, vol. 6 by William Shakespeare, 1723.
3. Denton J. Snider, "Cymbeline", in his *The Shakespearean Drama, a Commentary: The Comedies*, Sigma Publishing Co., 1890.
4. William Hazlitt, *Characters from Shakespeare's Plays*, 1817.
5. Algernon Charles Swinburn, *A Study of Shakespeare*, 1880.
下記に参考として、Swinburn の一文を引用する。
"The very crown and flower of all her father's daughters, ——I do not speak here of her human father, but her divine, ——woman above all Shakespeare's woman is Imogen. As in Cleopatra we found the incarnate sex, the woman everlasting, so in Imogen we find half-glorified already the immortal godhead of womanhood."
6. Anna Brownell Jameson, "Imogen", in her *Shakespeare's Heroines: Characteristics of Women, Moral, Poetical, & Historical*, 1833.
7. 20 世紀初めには、Samuel Johnson による『シンベリーン』酷評は正しく適切な評価だとして支持する批評家が数多く出ている。Walter Raleigh, William Wilherle Lawrence, Harley Granville-Barker など

がその例である。また、Barrett Wendell, E.K. Chambers, Horace Howard Furness, Brander Mathews などは、当時、既にシェイクスピアは創作意欲、想像力共に衰微していく時期にあったとしている。Harley Granville-Barker, *Prefaces to Shakespeare: Second Series*, 1930.

8. Ashley H. Thorndike, *The Influences of Beaumont and Fletcher on Shakespeare*, 1901. Brander Mathews も Thorndike の間下に同意を示した批評家の一人である。
9. Horace Howard Furness, *Cymbeline*, ed., 1913.
彼は、文体の一貫性の欠如、劇展開上の矛盾等を根拠に、執筆協力者の存在を主張した。しかも、シェイクスピア自身の手になる創作は、イモージェンの登場する場面だけであるとさえ極言した。Walter Raleigh も共作の可能性を指摘したが、Furness ほどの極論は示していない。
10. Thorndike 注7を参照。
11. J. M. Nosworthy, the introduction of *Cymbeline*, *The Arden Shakespeare*, reprinted, 1986 (first edition, 1955), p. xxxvii
Nosworthy は、John Dryden の指摘したことを参考に、シェイクスピアによる単独執筆作品であること、又、Beaumont と Fletcher の両者の方がむしろシェイクスピア作品を模倣したと結論しているようである。
John Dryden, *An Essay of Dramatick Poesie*, 1668. Dryden によると、Beaumont と Fletcher が初めて好評を博した作品が *Plaster* であり、それまで二、三の習作はあったものの、すべて不評に終わっている。彼は、二人は既に発表されていたシェイクスピアの *Cymbeline* を手本として創作し、初めて成功を収めたと考えた。
12. George Wilson Knight, *The Crown of Life*, 1947.
13. *Cymbeline* の批評、分析を歴史的観点から扱った人々には以下のような批評家がある。Harold C. Goddard, J.P. Brockbank, Emrys Jones, Alexander Leggart.
14. G. Wilson Knight 注12を参照。
15. 引用文第二行目の助動詞“must”を含む一文を、そうしたイアチーゴの懷疑を反映した表現と解するのであれば、この“must”は“has to be weighed (weighed=estimated の意)”, “needs to be weighed”, “is supposed to be weighed”といった表現に置き換えることのできる、強い意味を込めた語となるであろう。
16. ローマ史劇『ジュリアス・シーザー』に登場するブルータスは、自分が最も高い価値を置き、そして自身も実践する美德 honour (日本語で表せば「高潔の精神」となるであろうか) を過信したために、アントニー (の雄弁) に敗れてしまう。それは、自らの高潔がもたらした盲目による敗北であった。ブルータスの honour に関しては、拙論「ブルータス：欺かれた美德——高潔という名の名誉に魅せられたローマ人」広島文教女子大学紀要第31巻を合わせて読んでいただけると辛いである。
17. 「ハムレット」第一幕二場の独白の冒頭で、ハムレットは自分自身の肉体を汚れたものとして嫌悪し嘆く。“O that too too solid flesh would melt,/ Thaw and resolve itself into a dew” (I, 2, 129-130) それは、母の早過ぎる再婚に衝撃を受けて抱き始めた、女の美や愛に対する疑いの語らせる言葉である。“frailty, thy name is woman” (I, 2, 146) とは、内なる情欲の求めに抗し切れず、相手構わず男に身を委ねる女を嘆き、忌む言葉である。そのような思いが、女の体内より生まれた己の肉体を嫌悪させる。そして、愛したはずのオフィーリアに尼僧院へ行けと言わせるのである。「尼になれ」とは、情欲という世俗の欲を象徴する世界と隔絶して、“beauty”が“bawd”に変質せぬことを願い、新たな汚辱に満ちた命を身ごもらぬためである。
18. E. K. Chambers, “Cymbeline”, in his *Shakespeare: A Survey*, 1925. Reprinted, by Hill and Wang, 1958.
19. クローテンの愛は自己愛に尽きる。何故なら、彼がイモージェンを欲するのは、彼女が王位と富を保証する最善の結婚相手に他ならないからである。イモージェンの魅力が外観の美に加えて、宮廷婦人の資質であると強調していることから、それは明白である。以下は、第三幕五場からの引用である。

Clo. I love, and hate her: for she's fair and royal,
And that she hath all courtly parts more exquisite
Than lady, ladies, woman, from every one
The best she hath, and she of all compounded
outsells them all. I love her therefore,
(III, 5, 71-75)

そして、クローテンが一方ではイモージェンを憎むのも、自分の求愛を拒み、軽蔑するため許せないと感じるからであり、その憎しみもやはり自己愛に発するものである。

20. “south-fog”とは、south wind を指すと考えてよいと思われるが、エリザベス朝時代の作品にはシェイクスピアのものに限らず、疫病をもたらすものとして言及されていることが多い。J.M. Nosworthy は、古代ローマの詩人 Ovid や Virgil の影響を挙げている。(The Arden Shakespeare, Cymbeline, note on II, 3, 130)
21. シェイクスピアのロマンス劇の中で、唯一人妻として登場する『冬物語』の女性主要人物、ハーマイオニに関しては、既に取り上げて論じたことがあるが、彼女は誇り高い女性として描かれている。拙論, “Hermione, A Woman of Honour”, Phoenix 第 38 号, 広島大学文学研究科大学院生英文学会, 1992 年。

** 尚, テキストは *Cymbeline, The Arden Shakespeare*, ed., J.M. Nosworthy, reprinted in 1986. を使用し, 本文の引用はこのテキストからのものである。

—平成 11 年 10 月 5 日 受理—